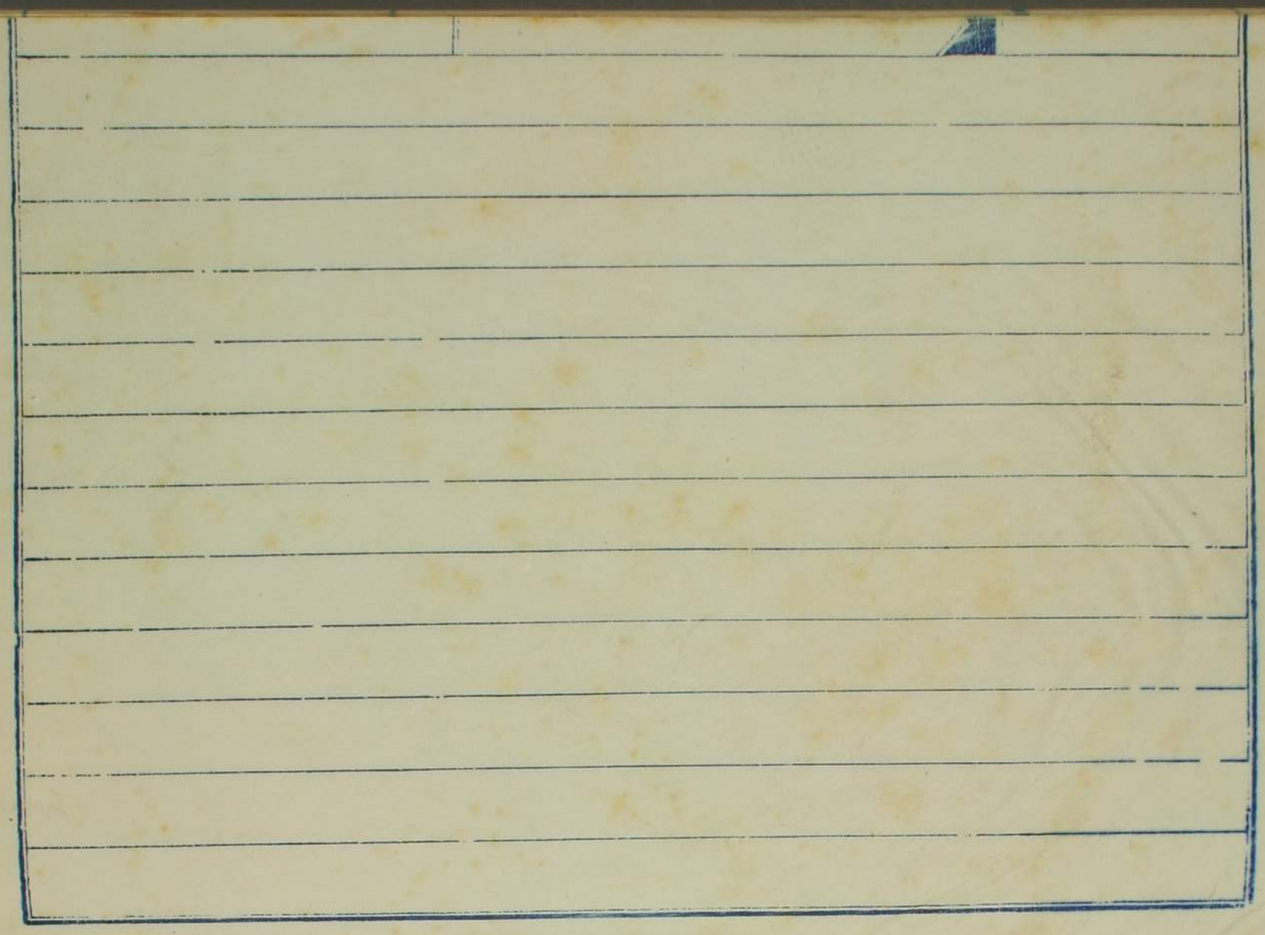
芝罘電報 自明治卅七年二月至五月

日露戰役史料 第八卷

早稲田大學

リ伊5
2107
8



宮城縣図書館

明治三十七年二月分

芝罘電報集

特
リ5
2107
8

露艦十餘艘旅順
投錨

露国艦隊の旅順
帰航

二月三日

露国軍艦セバストポール號ノ外戰闘六隻巡洋
艦六隻水雷敷設艦二隻今朝旅順ニ投錨セリ其
行先ハ不明ナリ

二月五日

去る三日旅順口ニ投錨シたる露国艦隊（戰闘
艦七隻巡洋艦六隻駆逐艦水雷艦若干）は同日
大連湾ニ入り更に何れにか向けたる後翌四日

露兵韓境進発

午後旅順ニ引揚ケたる模様なりその情報当地に達せり

二月六日

四五日以前旅順より歩兵五個大隊騎兵一個中隊砲兵二個中隊又大連より歩兵一個大隊出発せり内一部隊は營口方面に向へる其他ハ朝鮮国境に向へるなりん

露近到着の露兵

オデツサより一千八百の陸兵を乗せ出発せる運送船カザニー號は去る三日旅順に到着せり

昨今の旅順

露国艦隊の動静

二月五日

旅順海岸の各砲台に歩兵を配置せり又昨夜十時頃目撃せし處に據れハ水雷駆逐艦ハ港外五哩の沖に出で其背後に巡洋艦水雷艦砲艦等を排列し港外にハ各戦闘艦警戒し港内にハセバストポールと外二隻の巡洋艦のみなり

昨夕入港せし露国船にハ日本人二百名旅順より又今朝の船便にて同三十名ダルニーより美船にて丈那若カハ奇餘名旅順より発ル也地

旅順に於ける露国の大海戦
露国首位軍艦三隻を撃破す

に引揚げたり又外国の婦人小児百五十名昨日旅順より上海へ引揚げたり猶旅順の外国商店八殆々閉店し一大混雑を極め居れり

二月九日

旅順口に於て日露両艦隊の海戦あり戦ハ八日の夜十一時を以て開始されたり日本艦隊ハ先づ旅順港外に在る露国艦隊を攻撃し初めたるに二隻の露国戦闘艦は旅順口に再び入港せんとして甚入口に至るや水雷に命中して沈没し巡洋艦一隻も亦同じく水雷に命中し港の附近

にて乗上げたり

露国艦隊は漸て港外にありて自ら入港を能はず

漸攻撃は更に今九日午前九時を以て始まりたり而して其結果ハ未だ知らすに至るまで日本の損傷に関する報告ハ未だなし

右につき或る信ぜべき筋に到達したる情報

並に黒木野領事の報告より

二月十一日着電

旅順海戦別報

巡攻撃の開始前

昨日旅順港より帰着したる某商船乗組員の話
る處にてハ
吾が水雷艇ハ午前四時露国戦闘艦二艘大巡洋
艦一艘を拿捕し日本艦隊ハ微傷したるも艦形
ハ整然たり之に反し露国艦隊ハ頗る乱軍の體
裁なりしと

二月九日

日本領事ハ旅順口に於ル二ヶ月避難に本
人を英国汽船に乗せ当地に帰着したり其話
る所を聞くに今朝九時旅順口を距る十八浬の

旅順方面の景況
諸島

所に於て十六隻の日本大軍艦が旅順口に向ひ
航進せるを出會したり尚旅順口には三十人
の日本人有るが是等ハ明日当地に到着する若
なり而して彼等ハ露国官吏より懇ろに叮嚀に
取扱はれたりと

二月十一日

横浜汽船今朝旅順口より入港したり其乗客の
語る所に依れば露国の二戦闘艦並に巡洋艦数
隻ハ浮上りたり
英米汽船又隻許りハ旅順口に於て官吏の虜

旅順戦後の情報

抑留せらるなり

又風説に依れば日本は某湾に軍隊を上陸せしめたるが露軍の為めに撃退せられ旦つ重大なる損害を受けたりと但し是れは事実にあらざるべし

牛莊旅順口間の鉄道は武装せる清国人大團隊に脅かされ不安なりとの報あり

九日中旅順港内に碇泊し昨日午後三時迄果に到着したる樗逸商船の齎したる戰報は今朝の電報と同一にして九日書間の海戰は十一時二十分に始り四十八分に終り澤丸の港内及び陸

樗逸船の旅順情報

上に達したるものなり彼方に兵民四散せり多数の日本人を搭載せる英國汽船バスフェリー號は九日旅順より門司に直航の若きしし港内に抑留せらるるとなり露國艦隊の主力は同船の目撃したる所にては旅順港外にありしとい

多数の日本人を搭載して九日午後六時迄果を發し門司へ直航せる樗逸船は海上に於て砲聲を聞き同夜迄果港外へ帰り来り或は旅順方面にて再び海戰ありしなりと傳ふ樗逸軍艦

今午後二時入港せり

旅順再戦の風説

引揚日本人優待

昨十日ダルニーにて夜艇二隻破壊せらるたり
との説あり

二月十二日

ハルビンの日本人は浦港の領事事務官より便
船ありとの電信に接し五六七の三日間に浦港
に引揚げたるもの六百人七日に旅順及び牛莊
に十五人八日に球りの百餘人皆復代事務所と
共に牛莊に達河奉天の日本人は六、七両日に牛
莊に、鉄岑に公主岑より二八日九日に引揚げた

旅順情報

旅順の情報

り

十日哈爾賓より ダルニーに達し今朝吉地に着
せるものゝ直話に敵艇捕獲の報は虚説なり戦
闘艇二隻旅順船渠の前に繋ぎ修繕中なりと

カーダフ炭を搭載して旅順に至り九日砲撃の
際東港内に碇泊せし三隻の汽船吉地に来れり
一は那威船にて船長が砲撃の為め面部に負傷
し英国船フオックストンホールの機関手は肩
に負傷せり他は一は美国船ラスベラなり此二
人の負傷者と那威船の船客及びラスベラの船

長の談話を綜合して確実なりと認むる所にて
ハ戰艦チエサピークは軍港内に引入れら
れ吃水下の損傷は知り難きも上部に四人並び
て出入れべき程の孔を見受け戰闘力を失へた
るものゝ如し他の戰闘艦はレトヴサンなる
ものゝ外面上損傷を認め
ざるも頻にポンプにて水を汲出し居りしが
ラダなりんと思はるる巡洋艦ハ港口の入口なる
虎尾半島の海岸に舳を乗揚げ艦尾は沈みたるも
大損傷にあらざるべし艦隊の死傷者は餘程多
数なるべく切りに撤収運搬されたるを見受け
たり良国士官の談に八日の曉天に發射せし水
雷は四個にして内一個ハ外れたる由同夜海軍
士官中に演劇を見居りしもの多し艦名に付
ては稍疑を存すべきも其他ハ確実なりと信ず
英国汽船ラスベラ船長の談に同船ハ日本人を
搭載し門司へ航行の筈にて百三十人切符を賣
りしが軍港碇泊中に六名の日本人勝手に端艇
にて乗船せしを發見せられ荷物を船中に残し
陸に送り戻されたるに本人の搭載を禁ぜられ
たりと此事のみは本人の消息は取調ゆ
なり

二月十三日

樅逸軍艦

樅艦遁走者搭載

旅順戦況後報

樅逸軍艦ヲチエープ號今朝入港セ

二月十四日

樅逸軍艦ハンカー諸外国ノ遁走者ヲ搭載シテ

一昨日旅順ヲ抜錨サリ

二月十六日

八日夜フエカシウチ（戦闘艦）ハ機関部ヲ

打抜ケレトウサザル（日）ハ艦首ニ大穴ヲ

明ケラレ両艦共其夜如何ニ尽力セモ港内ニ

引入スル能ハザル程ノ大損傷ニシテレトウサ

カンハ遂ニ入港セル力なく態と虎尾半島ニ坐

礁シ艦首ヲ陸地ニ乗リ揚ケ艦ヲ水中ニ沈ム西

ヨリ来ニ横たはり港ノ入口ヲ塞ギ黄金山ノ下

ニ僅ニ大船ノ通ル水路ヲ開ケリ十四日ニハ艦

ノ水雷発射ロ半分程水ニつかり船体ヲ追フ

モ益ス沈みつゝあり バルラダハ石炭倉庫ノ周

囲ニ十八呎ノ穴ヲ明けられしが石炭ヲ満載セ

したり浸水割合ニ少く今ハ浮ビ居モ大修繕

ヲ要セ此夜水雷砲艦ニ曳行方不明トナル多

分同志打のため沈没セしなるべ バルラダハ戦

死三名負傷七名レトウサカンハ戦死七名負傷

十二名ノエサッレウサチは死傷ナク九日の戦ニ
ペトルバウルスク戦闘艇は上甲板と橋上甲板
とに命中ーバーヤン（装甲巡洋艦）は水平線
のケー上と西舷を通して打ち貫ケルアスコル
ド（巡洋艦）ハ艦イ檣を折ラン二番目の烟筒を
打抜ケルノーヴサク（巡洋艦）ハ艦を破壊セラ
ル貞先ニ戦列より逃レ出でたり修繕せざれバ
浮ム能はズペツスト、トラーシタイ（駆逐）は
機関部を打貫ケルたり此際の戦死者三十名負
傷者百廿名なり
軍港司令官グレビー少将の言に艦隊ハ此ま
戦闘ヲ為ると得ズ日本の砲撃ハ最勇艦隊ノカザ
ンを疲ニ落ち水平線の船縁を打貫き黄金山とデ
ンキ岬の間ニ落ちたる砲撃のため一名即死ー
二名負傷ー一度ハ船渠前の器械場を焼き電信
局の側ニ落ちー撃ちは近隣数十戸の硝子を破
壊ー白玉山ニテハ十数名の死者を生ジ支那人
ハ勿論義国の将士も又殆逃走ー市民ハ日本
人の襲撃と支那人との暴行とを危惧ー大恐慌
を極ム
九日以来市民の電報発送を禁ズ
先づ完全なる軍艦ハボルタワ（戦闘）ペレス
ヴイヤト（同）デイヤナ（巡）の三隻ニシテ
軍港内ニ三隻西港ニ七隻入口のレトウサザン

旅順第二回海戰
日本艦隊大勝

と合せて十一隻を見受けたれば戰闘艦巡洋艦の中二隻は或は沈没せしならんともいふ
以上諸項は尤も信ずべき詳報として數日来の報告を訂正增補したるなり再報す

二月十五日

十四日未明日本艦隊附屬の水雷駆逐隊は旅順口にありし敗残の露國艦隊を襲撃したり
露國艦隊は九日の海戰後一先づ大連に入りしも其後更に砲台掩護の下に陣列をなしたるものゝ如し

引揚邦人虐待説
聞

敵艦は無論此攻撃によりて多少の損傷を被りたるも日本駆逐隊は全く無事なり
敗残の露艦は戰闘艦ペレスウエットー（一萬二千六百七十四噸）ポベーダ（一萬二千六百七十四噸）其他は巡洋艦数隻なり

二月十七日

十三日旅順に於て福列號に乗込みし婦人及の引揚邦人男子百名は最初百餘名の婦子と同行せしが大石橋に於て露兵の虐待無理に男女二組に分離せらるゝ男子は一夜拘留せらるゝ婦

獨艇テチス

遥加號長崎ニ向フ

一旦牛莊ニ送ラルヽ後更ニ旅順ニ送ラルヽとの報ありし多分瀬川領事引揚後の事なりしか当地の水野領事ハ美國領事を経て右の実情を旅順ヘ問ひこゝに於て調査中なり

獨逸軍艦テチス號十一日抜錨せり

遥加號ハ避難邦人四百名を搭載し今日午後四時仁川を経て長崎に向ふ此内半分ハ仁川上陸の筈なり

二月十六日

旅順ニ在ル日本婦人

獨墺軍艦と星条

既電の日本婦人ハ旅順にて露國政府より郵車なる取扱を受居り便船次第送還せべしと露地露國領事へ通知ありたる旨今朝美國領事より水野領事へ通知せり

二月十九日

獨逸軍艦テチス今午前十一時入港せ、昨日入港したる墺太利軍艦はアスペルンにして香港より回航せしものなり

米艦大沽

本日午後一時米国軍艦一隻入港ス

二月二十日

捕逸軍艦拔錨

捕逸軍艦ヲチス今午後三時拔錨ス

米艦ウサルミレトン

米国軍艦ウサルミレトン午後六時拔錨ス

二月二十一日

米艦ニエーオルレアン

米国軍艦ニエーオルレアン今朝八時馬尼刺ヨリ入港午後二時半拔錨ス

貧民ハ無償使来

伊集院天津領事ハ貧民ノ無償使来ヲ許ス旨

水野領事ト協議ノ上開平局ヨリ借入ルタル汽

船ハ二十三日秦皇島ヲ發シ二十四日當地ヨリ

長崎ヘ直航ノ筈

二月二十二日

具後ノ引揚本邦人

昨午後一時ガルニーヲ發シタル汽船クヘントー

號ニテハ本人ノ男七人女百六十六人今朝当地

ニ引揚ケタリ内百三十五人ハ女ハ既電牛莊ヨリ

旅順ヘ送リ戻サルヽ連中ニシテ十一日牛莊ニ達

さるや不穏なる取扱を受け直に旅順に送り戻さんとの途中にて旅順停車場に一泊警察に五泊せり吉林の日本人男五人女十三人（内人の妻一人）十一日に吉林を発し（寛城子以後汽車無賃）夜の警察に四泊せり其他満洲各地より引揚げたる十数名追々旅順に集り来りせは旅順より外へ出発せし時は男九名女百六十三名となりし牛荘よりの一行を除く外汽車中厳重の護送を受けなから待遇郵等にして旅順かんこーの警察にても充分の保護を受けなり かんこーにては男は警察に女は海軍倶楽部に一泊し男一名女三名の新来者と共に昨日午前十一時より船に乗込みの水兵数名番兵として同船し長崎の航路と違ひて（水雷敷設の為なりん）北三山島東海岸の間を進み港外に出でしとき番兵は小蒸汽に乗移り此時迎船者の甲板に出づるを禁せり支那人の船客には切符を売りしかは本人は隠て無賃なりしも一行中或は不都合の取扱を受けしものありしも其は大抵下僕の過失にて上官よりは充分保護をへしと厳命せしりの如し

去る二十日は旅順に在り二十一日は同港を発し

大連湾を経て二十二日出発し、着したる病逸一商船乗員の談る處によれば海戦以後の旅順口は上下一般に恐怖の念を抱き婦童は全廃の有様にて何れも非常に狼狽の態に見受けられたり尚は婦女子幼子共はぜ武器を携帯せしめ万一に備へ居たりと

病逸汽船プロンポを徃訪せしに一等運輸手は
く同船は秦皇島にて石炭を積み去る十日午後
旅順に着し翌十一日午前十時旅順を抜錨し同
日午後一時ダルニーに着せしが其の日水雷敷
設船（エンセナウン）過まりて水雷に触れ十二

病逸汽船乗組員談

日十形の迅洋艦（砲艦の誤なりん）も亦同じく水雷に触れ二隻とも爆発破壊せるを見たりダルニー市中に至つて平穏なりダルニー出港の際に一名の士官十二名の兵及び水先案内乗船し船客を中甲板に船員を各自の室に閉籠めて番兵を附し船員の或者に室の窓より外を視うんとせしに番兵に銃先を向けたり支那人の船客三百名に十五井づゝ支払ひしが日本人に対しては甚冷酷事態に請求なくして無理に接載せしめたりとゝふ旅順西港に碇泊中十二日午前零時半迅洋艦より十五発砲撃せらるゝなり

胡散な外国船

中之道花未遂事件

注来芝罘行と称して日本を発しダルニーに向ふ石炭船多く其筋にて注意を怠らざりしが現に一昨日門司を発せし某々国汽船二隻は同下或筋の取調を受居り

ダルニーに滞在せる清国支那商徳和洋行の主人（露国所用商人）よりの通知に接し同地の支那人を引揚げ来る旨今月十二時出帆せる（港外三山島）第一徳和號にて牛肉千二百頭分を送らんとせし外国人なりしに税関は之を拒絶し我領事は荷主の筑紫領事に対し今日

海底電線敷設船入港

山海関引揚人数

の場合旅順又はダルニーに糧食を送らんとせるものあらば抗議を為すべしと通知せり

二月二十四日

丁抹の海底電線敷設船フトールリデリスク午前十時入港せり

牛莊領事は本月七日に筑紫各地に領事館引揚げの電報を発し九日に至りて牛莊留民に翌朝出発せべしと通達したるが其使果して後々山海関に引揚げ十日頃に避難者最も多ら

廣平號東巡遭難者

りしすべ同領事は貧民に計り天津行の旅費と
して一人に付十五弗を支給し橋を渡り引揚
げ来る者に山海関迄輸送の便宜を與へんこ
とを米国領事に依頼し十二日を以て引揚けた
り爾来山海関にて鈴木書記生西村警部出張し
郵船会社出張員と共に救助に尽力せり遭難者
の過半に所持金乏しく衣服の用意なきも
のあり天津同胞救済會に松本氏を派遣し毛布
牛肉鶏卵等を支給せり

天津領事の庭に入れたる廣平號は遭難者三
百卅二名と當地まで便乗せる米国陸兵二名と
搭載し昨日午後八時秦皇嶋を發し今午後二時
当地に着せり當地より九百四十五名乗込み
明日未明出發の筈なり三百卅二名を細別すれば
四十一名は營口より廿一名は奉天より九十七
名は遼陽より六名は松花口より五十七名は鉄
嶺より二名は公主嶺より九名はイツウシウより
廿五名は哈爾賓より七名は寛城子より三名
は旅順より九名は大石橋より八名はチタより
九名は錦州より七十二名は天津より五名は山
海関より来れるものなり其内百九十二人の廿
八過半賤業婦にして男の大半も夫れに関係ち
るものなり

四上後報

前電避難邦人搭載の汽船廣平號は初め佛國公使館書記官秦皇島に来り兵百名を仁川に輸送するため侵入れたりと開平局に交渉せしも開平局は我避難者送還の議ありと聞き佛國の請求を拒絶し我天津總領事の屋入を快諾し芝罘を経て長崎迄の屋船料二萬弗も開平局と郵船會社の盡力にて八千弗に減じ二十五萬弗の保険を附したる由二十一日總領事館より同船出帆の旨を山海関に電報せし次で森書記生出張し来り準備を整へ二十三日領事館より切符を給與し午前八時一行を臨時汽車に乗せ人數検査の後一領事館の勧告に應ぜざる帰国せざるものは内こい逢年より米蹟せしもの五名ありとゝふ）十二時半に發し一時半頃秦皇島機橋に着し直ち乗船領事館員は長崎迄の船中監督を平戸の松倉書記官に依頼し引取りたり避難者中三名の肺結核患者なりし外格別の病者なし此船には便乗米人の外一人も外国人の乗船を許さず當地の避難者は領事館の通達により十二時迄に波止場に集まり船の入港を待ちし者の波止場に到着し毛布を肩に掛を纏ひ靴を穿きたる異様の婦女子も毛布包の荷物等を携へ二時過より我先に甲板に飛込む其混雑

德和號の傷船

云はん方なし四時過には大抵乗込終りしが船の錨地甚だ遠く風破荒き為め船にて既に嘔吐を催せしもの多く手を以て梯子に引上げらるゝ漸く乗船せる等驚擾極まりなし船内にて一時迄中にて離れ〳〵となりし父子夫婦朋友互に無事を祝し前後の艱難を語り合ふもの多く苦物を見送るもの多く甲板には見送りの人往来し甲板に所狭き迄蓆の上に陣間もなく起臥せるを見たり

一昨夜九時に向ひ第一德和號は三山島沖に達したる後陸上と交通せるを得たり當地より

廣平號後報

廿三日旅順港攻撃

の船客を搭載せる後今朝當地に引還せり

二月二十五日

廣平號は當地より男女三百名を搭載して昨夜九時長崎に向へり

昨日午後我戦闘艦四隻巡洋艦九隻威海衛を東一通巡したりとの確報あり

昨朝奉皇島より入港せし捕逸船は同日午前三時旅順方面にて砲聲を聞き探偵を送ひ出せ懸けうんたりと傳へ又昨朝上海より入港せし海

底電線敷設船（大北電信会社）し一昨日旅順港沖に砲聲を聞きたりと報じ朝昨五時旅順の東水板子を發して八十名の支那人を搭載し昨日夕入港したる支那ジャンクは午前六時半陸地より五六哩の沖に認めたる日本の大形小形の水雷艇十四五隻に対し旅順砲台より盛んに砲撃せし彈丸皆海中に落ちたるを目撃し旅順港外には我艦一隻も見當らずと傳ふるを見れば或は二十三日の夜より翌朝に撃ち我艦隊が第三回の旅順襲撃を試みしものなるべしまた昨日當地の露國領事は二十三四両日旅順砲撃の係は本軍艦一隻を撃沈したりとの電報旅順

より營口に達せる合を發表せしも二十二日に天津の露國領事へ宛て旅順砲撃の際損傷せる千歳松島高千穂の三隻皇軍に逃来り沈没せりとの急電を発せ我の領事なれば之を此報を信ずるもの少し

旅順口の露國艦隊より當地の露國領事の許に達したる電報に據れば本國艦隊は二十四日の夜及び二十五日の朝に於て旅順口を攻撃したるも砲台にて撃退されたるは本は四隻の艦を失へりと云ふ

南支当地の住民中には昨夜半砲聲を聞きたる

旅順ヲ四回攻撃

旅順港攻撃別報

を破壊せるものなり多分海戦のなりたるものなるも此以外に更に確聞せる所なし

二月二十六日

日本艦隊運送船四隻を沈て旅順の港口を閉づる計畫なりしも由なれども昨日の路透電報にある彼得堡の公報中運送船二隻の沈没にして事実なりとせば二十三四両日に其計畫を実行せしものなるべし但し果して吉く港口に沈めしやの疑問なりと或筋より聞知せり

旅順陥落の風説

怪しき特逃汽船

雪中の生還

今朝来外国人間に旅順陥落の風説盛なりなれど運送船を沈めて旅順を封鎖したる誤聞なるべし

偶逃汽船チーズン東の或港へ行くと称し今朝旅順の方面に向へたるが如き若国領事より傳へ入れたるものなるべし

二月二十七日

廿四日旅順港口に沈めたる仁川丸と武蔵丸の乗組員三十人中に於て所属参謀大尉仁川丸の監督島崎中尉等四人の士官と二十五名の水兵

駐清韓国公使の帰国(1)

水野領事の公報掲示

の無事ハ一昨朝ニ至リテ確カラルルニ至リ水兵一名だけの運命不明なり戦況ハ当地ニ於テ稍知らんとす委細次電

伊国領事（朝鮮の代理領事）ハ仁川近傍地の文那汽船を雇入れたり多分一両日中ニ北京より来るべき朝鮮公使朴齊純帰国の為ならん

当地ニテ我軍艦並ニ運送船数隻の増高き為め水野領事ハ今朝旅順港口を塞ぐ為め石船三四艘水雷艇ニ助けらん港口ニ向つて突進し沈没の目的を遂げたり乗組士官水兵皆無事なりと

海底電線布設船の換錨

海底電線と中立問題

汽船並罠帰

一公報を掲示せり

丁抹の海底電信布設船今午後一時威海衛方向ニ向け換錨せり

昨日水野領事ハ大北電信會ニ対し我政府ハ會社の敷設船ヲ並罠旅順間の電線を修繕せば之を以て中立の義務ニ反するの行為と認むべし と通知せしに會社ハ還ニ通知書領収の旨を回答せり

昨震並罠ハ デイリー、メールの記者が傷船

芝罘附近の中立維持

して仁川に向ひたり

近来芝罘附近の海岸よりジャンクにて牛肉を
對岸へ巻揚入れるあれ多く水野領事より道台
に抗議せしめ彼の道台は其附属巡邏船鎮海丸を
して近海を警戒せしめ居れり

汽船衝入の中止

二月二十九日

仏国領事の傭ひ入れし支那流船は露西亜人の
船長が仁川行を承諾せざる為め傭ひ船を断り
たり

旅順閉塞後聞

二月二十八日

旅順閉塞隊中に於て仁川丸及び武揚丸の乗組
将士最も危険を冒し最も艱苦を忍びたる如し
當地に於て知れたる事実によれば仁川丸に
は武揚丸と共に三艘のボートを具へたりしが
閉塞実行に際して大低いづれも敵弾のために
破壊せられたり最後に通当の決定地点と信ぜ
る處に至り碇を投じて自ら爆破し係ろに船
を去らんとせるに臨み稍々使用に耐へ可きボ
ートは仁川丸と武揚丸と共に一艘を有したる

カみ
元来水雷艇逐隊は老鉄山の下に於て沈没隊
を救助収容する計畫なりしが当夜東風強く波
高くして漕き出だしたるボートよりは駆逐隊
を認むることを能はず已むを得ずして発火信號
をなしたるが却つて敵より一時探海燈と砲火
とを浴びせられ信號も其時亡失したり
斯く僅に南に向つて漕ぎつゝある中に我一水
雷艇を認め得たるにより風呂敷を振りて信號
せしも其効なく横我水雷艇を尋ぬて漕ぎたる
が幸にして敵彈に中らず逐に二十四日の天明
となり最早水雷艇に救はるべき望みなきを

知り只南へ南へと漕き出したり金州半島を離
れし時に東風強く吹き付けたれば勃海湾内
に吹き飛ばされんとはなき手と思ひたるが幸
にして此危険をば免るを得たり然れども二
度のボートは別々にて互ひに其消息を知る
由なく二十四日の午後となりては今朝未食を
絶ち居ることとて疲労甚しく氣力の及ぶ限り
南を指して漕ぎたるも未漸く本艇隊の所在を認
むるに至りとソふ而して武装丸のボートは
一時間先だちて安全地に到着したり武装丸乗
組の島崎中尉外一名下士以下十二名にして仁
川丸は森森参謀大尉外士官一名下士以下十三

名なる仁川丸爆裂後ボートを卸し用意を為し居る中に二等機関矢梅不謹藏氏は戦死したる敵の最も有力なる砲大はレトウサボンの砲にして武勇丸が早く行動の自由を失ひしは敵の砲火を避くる為め方向を轉ぜし時側面よりの砲弾に船を打たれたる故なり斉藤大尉は仁川丸の前檣に沈死隊の姓名を記せる日章旗を結始掲げたりと云へり

明治三十七年三月分

芝罘電報集

旅順、最新情報

三月三日

旅順の西に方り日本里程にて七里なる雙島より一千米（海戦前は八十米位の喪面の相場なりき）にてジヤンクを備へ二十二日出帆翌廿三廟島に着し二十八日出帆釜山府より廣地に来り清国人八十餘人より其一人の話に拠れば旅順附近に於ける敵の現在兵数は歩兵第九聯隊七百人、騎十聯隊千人、廿五聯隊二千四百人、廿六聯隊九百人、廿七聯隊千三百人、廿八聯隊千三百人、及び海戦後到着せし新兵千

三百人、其他旅順に於て召集せし衛備兵九百人
衛生隊四百人、輜重兵六百人、合計一萬千四百人
なり

廿五日、旅隊の兵は去月九日我艦隊の攻撃に陥り
我兵の上陸と防ぐ暇なく、黄金山の裏手に
駐屯せしに、我砲彈爆裂して死傷者百三十一人
を出せり、目下病院に収容せし海陸人員傷者は
二百人以上なり、牛は及び馬は居らず、馬
糧の青草は無代價にて微度なるを以て農民は
一日も早く日本軍の来らん事を待ちつつあり
麥粉は皆停車場に積み置きたり、其数一萬以上
なるべし、各商店の石炭は、番兵を附し人民に

敵情の所在及び位置

賣ると許すべし、人民は止むを得ずストーブ及び
台所に薪を代用し居れり、物價は平時の二倍に
達せり、苦力及び商人は旅順より退去せるを許
さるべし、居ると支那の不平甚し、目下軍港内に
修繕中の軍艦は二隻にして、西港に六七隻あり
雙島附近は防備皆無なり、海戦敗北後陸兵の意
気沮喪し、逃走の暴言は絶えざるに至れり
といふ

三月六日

先月二十七日迄の關東報に據れば、アレキシー

墺國軍艦大沽
浦塩方面の陸戰

フ總督は去月十二日を以て奉天に到着せしも
て始めて陸軍總指揮官として極東に来
るべきクロパトキン將軍の着たる迄リニウイ
フチ將軍哈爾賓に駐在して軍務を代理せしい
へり

墺國軍艦エリザベット今午後入港せり

烏江を距る百哩の處に於て我軍義兵を擊退し
敵は軍器糧食を棄て遁竄したる旨本日午前十
一時威海衛發にて其筋に電報せり

墺國軍艦

三月七日

昨震の墺國軍艦（戰闘艦）はカイザーウヰル
ヘルム三世の誤りなり

美國艦隊の行先

美國艦隊は香港を抜錨し行先不明なるも多分
南方に向ひしものなるべしと傳へうる

旅順近報

三月一日旅順の船渠より逃亡し陸路天津に出
で當地に来りし職工の直話に拠れば戰爭前船
渠にて使役せし支那人職工千餘名苦力千人
以上なりしが戰爭後賃金を五割增加し且取締

威海衛の英艦

厳重なる保護なき此等の支那人は續々逃亡し職工は四百人に減少し若干なき者も其代りに四百名の水兵を使役し居り戦争後船渠に入りし軍艦は二隻にして二月十二三日頃入渠せる一巡洋艦は目下修繕中にして本月十二三日頃迄は終工せざるべし他の軍艦は夫々仮修繕を了へ目下港内に浮び居る軍艦は都合八九隻なりといふ

英艦ファイアーレス本日午後出港し威海衛碇泊中の英艦は二隻となれり

墺国軍艦出港

旅順情報

墺国戦闘艦午後二時半出港せり

旅順の船渠より逃げ来りたる職工長の談に二十五日午前大形の軍艦一隻と小形の巡洋艦一隻は運送船沈没（我閉塞用の沈没船の事なり）の様子を探うんとしたる港外に出でしに沖合にありし日本艦隊の襲撃を受け大形の艦は艦尾を損じ二隻とも慌てて港内に逃げ込みしと目撃せり黄金山の砲台は大半破壊せられ今は用に堪ゆるものは三ヶ所のみなりとぞ

三月八日

二日旅順を發し天津を經て本日當地に着した
る我國官用商人淺和洋行店員の談に曰く東清
鉄道は軍隊の大輸送を口実として支那人の旅
客を拒絶し居れるが金ハ本店の證明に依り漸
く乗車を許されたり然るに事実は只空車の往
来のみにて軍隊の輸送を見ざる我人側にてハ切
に旅順の兵数を誇大に言ひ振り居るも実際ハ
意外に少数なりと支那人の所有せる食物ハ無
理に徵發せられし者ゆえ其欠乏に苦しめる支那
人ハ日本兵早く攻め入らざれば餓死せべしと
憂慮し居れり艀渠に修繕中なる巡洋艦の外ア
スコリッドは西港にて二本の煙筒と艦首の大
砲を修繕しつゝあり黄金山の砲台ハ過半破壊
されたりダルニーにてハ小艀渠に四箇所、港
務局の周囲東清鉄道汽船部の裏手なる大家屋
の周囲、振子の大船渠の周囲に数箇所、大
桟橋の両側十一尺毎に一ケ所の地雷火を仕掛
けたり先月廿日頃八十餘名の支那人旅順より
ジャンクにて出帆せんとせしに我兵に見付ら
れて六日間警察に拘留されたり

三月九日

昨日旅順攻撃

其出處明白ならざれども日本艦隊は本日更に
大挙して旅順口を攻撃したりとの説当地に行
はる

三月十日

韓国公使帰国

前北京駐劄韓国公使朴戴純氏天津より来着せ
り

艦国軍艦の出港

三月十一日

墺国軍艦アツサン本日午前八時出港せり

ルニー情報

去る五日ルニーを発し清国の老虎灘を出
帆せしジヤンクにて帰来せる支那人の談にが
ルニーには支那の夜兵あり其内訳は毎夜
銃を持ちて市内を警戒し停車場にては何時に
て也旅順の引揚げ者に対し後車の準備を厚
為せり又金州に数設せし地雷火は去月廿七日
頃の砲撃爆発し若干の夜兵死傷せりと謂ふ

旅順口大砲撃

三月十二日

日本領事の報告に依れば日本艦隊は去る十日

旅順陥落

旅順にも砲撃したるが其加へたる損害は非常にして火薬庫は爆発し市街は炎焼しつゝありと露人は砲台の外隠ての物を放棄しつゝありと称せらる

露国艦隊は旅順に外に於し日本艦隊と交戦したるが結局露国ハ駆逐艦数隻を失ひたりとの報あり

只今入港せし英国の商船の報に曰く昨夜探海燈を見たり日本軍艦なるべし昨夜以来砲声を聞かず今暁旅順方面に黒煙の揚るを見後々進行したりとウサギを距る一理まで近寄りしに虎尾平島最大の砲台は無惨にも破壊され池の三砲台も人影なく砲なく新市街は数ヶ所に火柱燃上り大火事の最中なり尚市街の家屋は火災に罹らざるも煙筒に煙を見ず虎尾平島の海岸第一、第二、砲台の間に日本運送船一隻沈没したりウサギの向側即ち黄金山の下に一隻沈没したりウサギは入口の内部に埋まり其の背後に数隻の駆逐艦ありしものゝ如くなりし人影なく煙も見ず砲台、軍艦、信號台其他就中の虎も旗を見ず旅順全市死せるの如く信號を発せしも応ずる者なく暫時見物せし後七時過世界に向へしに

ホワクストンホール湾ハて出港せり外国より見れば露人ハ旅順を棄て逃竄せし者の如し然らざれば先月九日以来抑留同然のホワクストンホールハ出港せるなるべし

威遠壕子營西砲台ハ大破損し炮煩顛覆せ
欧羅巴ハ新市街ハ今年前（十日午前）大煙熾にして市街ハ寂として往来なし
砲台附近兵卒見えず
レトラサガンの内側ニハ駆逐艦四隻ありしも
何れも同様煙を揚げず
艦上一兵を見ず

四十人の支那人を乗せ去る十日の夕刻ダルニーを発して昨夜当港に入るジヤンク船長の談に九日朝より十日夕刻迄旅順方面ニ時々砲声を聞きたり又同船長ハ十日西年日本軍艦ハ三山島を砲撃し新設の望楼を破壊したるを目撃せり
ダルニー附近の沿岸ハ海岸の支那人に遠く立去るべしとの注意を書記したる木片近来屢々に漂着し露人ハ之を見て日本艦隊ハ砲撃の虞の豫め流したるものなりと噂し居る由

死旅順の生旅順

先月九日以前より旅順に在りし英船ホンクストンホーン号入港し、つゝ、ありて旅順の近狀を聞くなり次に次に待受くる支那人外国人山の如し

一言も語らず

前電ホンクストンホーンには元来軍用炭を積み先月九日以前に旅順に着し荷揚済みする所戦爭となりしに依り船長は船と石炭を露国政府へ引渡し乗組員と共に芝罘に引上げ爾来船は旅順軍港内にありしが六年餘旅順にて水先業内を居せる丁抹人船の乗組員たる二人の技師人と共に本日當地に廻航せしものにて丁抹人は直く旅順に返るべき三人共秘密を誓ひたりとて一言も語らず

旅順大砲撃評

三月十三日

日本艦隊は九日午後渤海湾に現はれ同海旅順近海に進航したるものゝ如く其駆逐隊が砲台附近に達したるは十日の黎明前にて露国駆逐艦との間に激戦あり双方損害ありたるも露艦は敗績して或は港内に逃げ或は破壊され或は沈没せり

駆逐艦の戦闘始まり十日午前九時より日本戦隊

艇の優勢なる一隊は巡洋艦と分れて老鉄山砲台附近に陣潜し市街及び老虎、黄金両砲台に向て巨砲射撃を行ひたる結果黄金山砲台には数個の大彈丸爆發し老虎山の三砲台にも多数の着彈あり黄金、老虎、老鉄の八砲台は各發砲せしも日本艦隊には損傷を與へず

日本艦隊より發したる巨彈十数個は黄金山の裏側及び老虎山の後方浅瀬に落ち其他無数の砲彈は重ねに老虎尾の對岸なる新市街に爆發したるは一帯の建築物焼火に包まれ其被害は数知れざりき港内の艦艇、造船所、火薬庫、船渠等要部は主として日本艦隊攻撃の目的となりし模様なれば大部分破却されたり

但し艦船の被害は明瞭ならず

軍港に使用せる職工は去月八日九日の砲撃以来大部分逃走したるは実際に何の作業も出来ざりしが十日の大攻撃に依りて殘餘の職工は勿論海陸の将校市民大半逃去せし形跡あり

海岸砲台にして砲撃を受けざるは金雞屯のみなり

昨電旅順死黙の情報を齎らし帰りたる芝罘発は一昨夜十一時過ぎ芝罘港外を發して旅順に向ひしに目的地附近に達したる頃景初一個

旅順探検写真

の探海燈と認めし次で尚三個を認めたるが天明
に至り旅順港の内大砲を見しとき船長は進航
結纜を肯んぜざりしにより其屋主は為一の情
合船賃を辯償するの約を結び漸てしトウカが
しの傍に近寄らしめたりといふ

至果疑の報道に依り旅順陥落の事実指點を可
きものなりに拘らず昨日同船が旅順附近に於
て我艦隊の存在を認めざりしを以て想見する
ば九日十日の我艦攻撃の為め敵の防禦戦開力
は大に破壊毀損せられたる結果敵兵の士気阻
喪して敢為合寂の為令行はれず我艦隊の引揚

後に於て士卒騒擾逃竄するもの多きに乗じ旅
順附近に抑留養養せられたる馬賊の一群夜
国の命令に背き不平を抱ける支那人と共に大
に旅順を荒したるに非ざるも大事を起こ居
たる場所が露人新市街の新市街に止まり支那
人の住居せる陋市街が此災を免れたるに徴も
れば此想像も根據なきに非ずして旅順が一時大混
乱に陥り死状を呈したるに至りしや知れ又想像
せらる
昨朝に至る迄の我艦隊が旅順の現状を知らざ
りしも確なるか如し

ホツクストン新清

昨電ホツクストンホーム號を回航せし水先案内ランバーブ氏は先月十二日同船が旅順に抑留せられたる後に一旦うみ解放せられたる同船の船長イルバート氏と共に先罪に来りたる事あり其旅順に帰るに臨みイルバート氏ハホツクストンホーム號の事を託し若し無事に同船を回航し来らば二萬弗の報酬を與ふべしと契約したるよりランバーブ氏ハ此の契約履行を得んが爲に今回旅順より同船を持来り昨日其船長に引渡したる由なりランバーブ氏が先罪より旅順に引返したるは先月末なり稿了ホツクストンホーム號にて今回旅順より来りし

十日旅順攻撃の別報

或支那人は同港内の敵艦中四隻は猶戦闘に堪ゑんと又完全なる駆逐艦も四隻ありといふ

一説として報じ置く

ホツクストンホームに来来りる支那人十五名の談に十日の砲撃は強く彼は引續き各砲台逐に戦闘力を失ひて沈黙せり露艦は皆港内に潜み戦闘にかはらず前夜駆逐艦襲撃せしもの又や三隻の軍艦港内に沈没し猶浮び居るもの又隻あり支那人ハ多数の外食物を給與せられ旦つ砲撃を恐れて逃走し旅順の防禦力ハ本艦隊の奮めに殲滅せられし事は慥なる報告

旅順虞相の隠秘

警一致せり

三月十四日

當地駐在の某領事は開戦以来常に日本人の挙動に注意し居るが紛中余が種々の方法により英船ホワクストンホールの支那人を雇誘べし一事は大に其注意を惹きしものと見に因領事は二回まで余を訪問したり

ランバード氏は到着以来新聞記者の面會を避け十日の旅順攻撃に関し堅く沈黙を守り居るに係はらず不思議にも先刻余に面會を求め支那人より如何なる事を聞きしや支那人は金銭を共にすれば如何なる虚説をも傳ふべしといひて一切を否定せんと試みたり又芝罘號の船長は自らレトラサンを跡る一浬近近筭作と傳ふるも現にホワクストンホールが港外に出でしとき芝罘號は少なくとも六浬沖に碇泊したるを見たりとて頻に芝罘號の實らしたる傳説の正確ならざるを言ひ尚ほ十日の戦況をも談りたり其談話中には芝罘號の進入好し港口を距る一浬より以内に精遠しとせば旅順の入口近近寄りしとの確実なるを反證するもの有り

旅順附近の警戒

營口陸戰の風説

遠坂の黒煙

旅順にの来たりヒントウ附近には露国の歩哨百名餘散ー居たりと云ふ此地より旅順、大連両地へは電話の通じ居たるものなりとなり

營口に附近に於て清国陸兵我が兵と合して露兵と衝突したりとの報告地にたる来外人の評に達せり

本日午後当港沖二十哩の處に黒煙の點々たるを見たり

英米艦隊来港の風説

土官戦の風説

旅順口の狼狽

近日中英米両国艦隊當港に来着せんとの風評頗る高し

三月十五日

露国艦隊去る十一日旅順口を出で翌十二日外洋に於て日本艦隊と衝突したりとの風説あり種々の流言を行ふものあるも更に確報に接せざ信ずべき報道は當地に於て全く之を得ざりと聞はず

旅順口の狼狽甚しく其陸兵を貔子窩に分遣し

美艦朝鮮ヘ

旅順鎮相一班

なりとて報報あり

美国軍艦チーテフド江湾翌々廿五日威海衛を出で其儘朝鮮に向へり

余は今朝再びランバーブ氏に面会せしに其談に曰くマカロフ中将は九日夜半自ら三隻の駆逐艇を率ゐて港外警邏に出で我駆逐隊と衝突したる後拂曉右三隻を率ゐ一旦港内に引揚げしが其内機関を損傷せる一隻を港内に残し中将自身は直にノヴガックに乗移りバーヤンと共に更に出港せり當日新市街に放ちし一彈は鎮遠東港に碇泊せる四隻

は鎮遠の士官室にて破裂し鎮遠大将は即死せり

英米人は悉く旅順より退去を命ぜられたり蓋し旅順の近状を外部に報道したるためなるべし

併し獨逸人と丁抹人のみは在留を許さる外国人の数は澤村二百を出さるべし

澤督府は支那商人の輸入せし一切の食物を買上げ其力には日々賃金と食物を給せしつゝあり

支那商者は留切と称して外来の支那人外国人共に旅順に入るを許さざ

十日の砲撃は多くの砲彈東港に碇泊せる四隻

の那威船の近邊に漂ち来りしガサイエて、タドアルゴーグランドの三隻の船長は自分と共に軍港司令官を訪ひ出港を請求したり三隻共に十三日上海に向け出発せり尋ねて外一隻の那威船センチスは船長不在の為ランバーブ氏は近日旅順に帰り且つ果て回航船を廻航することとなり此ごろに旅順に帰ることを許されたり ホンクストンホーンは総督府の命により且つ果て廻航したるなり回船は既に船長に引渡されたり去る以上は露人顧問の話として報じ置く

旅順情況

三月十七日

十四日走鉄山の北嶺頭に砲を設せ二隻のジャンクにて今朝旅順附近より到着せり百名の支那人なり其内に婦人は旅順にては女子と十五歳未満五十歳以上の男子の外引揚を許さず其他の者は砲台修繕に使用せられつゝあり十日の攻撃中機械の側に働きつゝありし支那者十二三名砲撃の為め即死したりといふ

米国軍艦

米国軍艦シンシンナチ號只今仁川より来れり

十日砲撃情報

一昨夜ジャンクにて老鉄山の西方なる蘇澳嶋を出で今朝来着したる支那人の談話に曰く過日の砲撃に於て砲台は築造不完全の為め発砲の際自ら破壊せるものにて実に角大破損したるは事実なり負傷者は兵隊名人夫二百名にして其際水雷駆逐艦八隻の内四隻は旅順口に帰来せり他は行方不明なり又二本煙突の軍艦大損したるを見たり

同日の攻撃に露国方は九時頃迄十分應戦せしが其以後は砲火を減じたり多分弾薬欠乏せしものならん

八日蘇澳嶋に在りしジャンク二十五艘は旅順

露国領事の苦心

未艇の入港

関東艦の情況

情報

口の情況の他へ洩れざらんが為めに焼捨てたり

満地駐在露国領事は労働者の対岸渡航を促さんが為めに区長にて市中各處に貼紙をなし旅順は大連湾の苦力渡航責せることを及び今日までの戦争の事実を列記し何れも皆勝敗を決せざる旨廣告せり

未国巡洋艦一隻本日午後二時上海より入港す

新着七日迄の関東都督部に入れば遼陽にはクロパ

トキンの看任迫満州軍總督指揮官代理なるより
子ウサツチ中將駐在せり　後て遼陽に満州軍
司令部設置の噂ありしが事実なりと見に同地
停車場司令官は本月初クにパトキンの官舎を
準備せべしとの命を受けたり
三月二日通信大臣ヒルコーフ臨席し祈禱式の
後イルクツクより廿五台の列車を以て又三月
三日以来貝加爾湖鉄道は馬力にて間断なく運
轉せりとの報あり
新任旅順要塞司令官スミルノフ中將は二月二
十八日英斯科をキーエフウラジミルウイフチ親
王は同日露都を發し極東に向へり

先に皇帝親臨して卒業式を行へたるクロンス
タツドのニコライ第三世海軍機関学校の卒業
技師六十餘名は三月四日旅順に到着せり
第七師八東部西伯利亜の狙撃歩兵旅團（旅順）
及び極東太守の臨時參謀部設置の件本日の官
報に公布せらる
元侍従武官ヒユバーベンの引率せるチエルイ
イゴフ人の義勇隊哈爾賓三月四日發して旅順
に到着せり哈爾賓に於て三次の義勇隊組織せ
られたりとて其内クルジンチエンケイス人ア
ルメニア人より成れる一隊は朝鮮国境に輸送
せらるべし東清鉄道会社は長官の許可を得ば

義勇団を組織せんとて準備既に成り又浦汐
にて休職大佐等の発議により騎馬隊を組織せり馬武器其他の給費は加入者の自
辦にして官吏紳士所民の加入者多く今や二百
人に達せんとせり市民はニコリスク、ハバロフ
スク及び哈爾賓に向け逗留するもの多し
物價の暴騰を防ぐ為浦汐市会は公定價格を
議決し軍務知事の認可を受けたりと云ふ浦汐
の件は總て三月三日の電報に依るものなり

十三日旅順を發せし支那人の談に支那新市街
日本遊廓屋の後に市一周深八尺の堀を昼夜兼

行にて掘りつゝあり又三隻の軍艦と砲台は徹
夜して修繕しつゝありとゝふ

十日達陽を發せしを支那人の談に余は支那商
人と露國官衙との通譯なりしが戦争を恐れて
帰来せり達陽には目下二萬の露兵あり九連城
にも二萬程の露兵ありと人説あり開戦後最
初は旅順より其後は哈爾賓より一日約四十台
の貨車を以て糧食を輸送し居れば其準備非常
なり露人間に一海軍勝利の見込なきより陸戦
にては是非達陽附近にて日本軍を喰留むるな
うんとの噂ありて彼の遺棄たべき地方の如く

旅順の敵兵

地雷火を敷設せりと云ふ

牛莊の夜間砲艇には兵を置きに大砲を陸上に

卸し据附けたりと云へり

達陽の停車場には日々十三人乃至廿名位の商

人を限りて切符を發賣し居れるも賄賂さへ無

ければ何人にも賣渡し居り又旅順にては一

日廿名以下官署の證明せる商人に限り汽車に

乗ることを許し居り

昨日或夜間船長が旅順の友人より受取りたる

手紙にはれば同地の夜兵は二千五百許りなり

と云ふ

親夜叉上海行

未艇出港

敵の新情報

三月十八日

去尚健李学均の二名本日上海に向へり

午後三時米艇仁川に向け抜錨せり

新着の関東報にはれば「バレトウサホンは西港に

浅き入れたり」三日軽気球掛ラウロフ大尉旅

順に着き オボホフ鋳鉄所より「エレル大佐

職工を率ひ七日旅順に着きマカロフ提督と共

に海軍大佐ワシリエフ中佐シエリウ造船技士

大連情報

十日砲撃餘聞

ウシユクルチエフ、クロンスタット軍港造船
總監リンデベツク等八日着旅順ニ達シ又
哈爾賓日報ニクロパトキンは二十一日頃イル
クツクに着セル筈なりとす

ダルニーの入口に數設セし水雷ハ去る七日南
風の為め大連灣に吹き流され危険なるため爆
沈せしめたり又同地にて糧食乏しく市民大
に困難せ

去る十日の砲撃に旅順の露兵百名市民二
百餘名死傷し市街ハ大半家屋破壊せられた

第五回旅順攻撃

ダルニーの敵情

りとゝふ

三月十九日

昨夜より今朝に掛け我艦隊旅順を砲撃したり
との説あり目下探聞中

九日にダルニーを發せし支那人の談に老虎灘
には八十の露兵より大砲を据ゑ又海中には水
雷を敷設し居れり ダルニーには殆ど露兵な
し同地海岸停車場ハ石炭に注きたる石油の
量は非常なり開戦後同地に於て微發せし糧食

日本人の捜索

支那人の旅順談

車馬等は總て大石橋及び九連城に輸送せられ
露兵は内地に進行し大石橋には凡そ一萬の
兵ありと称し居り汽車より目撃せし所にて
も多数の兵ありたりと云へり

去る九日の関東報によれば露国ぶらゴエシ
チエンスクの日本人をスツルチチークに移せ
る砲浦汐の警察署は日本人の所在を申告せる
ものには賞を與へ隠蔽せる者は軍事裁判に附
せべしと公布せりと

十日砲撃の際露人に命じ旅順より遁走せし支

支那人救護と露国談判

那人の談に旅順なるギンスブルグの倉庫には
木製の小銃及び（此間脱字あり不明）等の準
備ありブルニーの市街及び旅順に至る鉄道
沿路は高さ一丈以上の丸太の先に綿と藁の混
合物を結び付け石油を注ぎ建置けりとつふ

三月二十日

旅順ブルニーの支那人は食物缺乏して困難な
極まるに因り當地の道台は両地に派遣せべき
運船の證明を露国領事に請求せしに領事は之
を拒絶したりとつふ

中立侵犯の件

直隸總督袁世凱氏及び山東巡撫周馥の連名にて局外中立国民の遵守すべき條項を公布したり

三月二十一日

本日正午十二時支那軍艦四隻入港せり

三月二十二日

八日浦汐を發し今朝當地に帰着せり支那人の

北洋艦隊入港

浦汐情報

旅順情報

談に六日我艦隊浦汐砲撃の際砲弾は五番目の砲台に落ち露兵五六人支那職工四五人即死せり市中にては露国婦人一名即死したり又四隻の露艦は入口まで出行きたるが其まま引返したり露人間には七日に日本軍艦二十餘隻港外に来りしとの説あり浦汐軍港内には露兵少く清国商人一萬人と馬賊五千餘人あり哈爾賓の停車場には露兵と支那兵とを見たりと

十七日旅順を發して帰来したる支那人の談に曰く市中には地雷火なく水師營の北金州街道には地雷火を敷設せり砲台の修復は殆ど竣功

我艦隊の挙動

したるが如く港の入口には三本檣の艦沈み居り一前震ハイラルは四本檣にして港内に沈めるもの汽艦ハ三本檣なり）羊頭灣に露艦二隻（駆逐艦ゲルニウの）沈没せりとの説あり前項の支那人ハ浦汐より天津を経て帰来したる者なり又此項の支那人ハビヤンクにて旅順に帰りたるものにて別人なり

三月二十三日

昨二十二日午後約二十隻より成る我艦隊の山東角を北進航したる旨威海衛より来電あり

朴齋純氏

破壊せられたる旅の砲台

た

三月二十四日

前駐清韓国公使朴齋純氏の一行昨日午後三時半仁川に向へり

旅順より帰りたる支那人の談に破壊せられたる各砲台の周囲にハセメントの空樽又ハ沙ックの米袋に土砂を盛りて整列しあり又虎尾半島の最上高地なる鶏冠山の砲台も破壊され大砲の後方に轉落し居るを見たりといふ

旅順景近情報

三月二十二日

余の旅順附近に特派せし支那人は去る十日午前一時半頃或地点に上陸し午後一時半羊頭湾即ち鳴湾を距る二清里半なる方家村を過きつゝ聞きたる所によれば二月二十五日の戦に駆逐艦三隻旅順より出で来りしの日本軍艦四隻一隻は旅順と羊頭湾との間に沈没し一隻は羊頭湾に逃げ込みしが彈丸艦部に命中し大災を起したるを以て故意に濱辺に乗揚げ乗組員四十餘名中二人は即死し其他は舩にて逃去した

り又羊頭湾に於ては大砲二門の砲手其他百人許りの義兵は皆逃去し義人は一名もなかりしとゝふ

夫より午後二時頃林家村を横切りに濱辺に十餘門の大砲より砲の後方に長二百尺深さ二十六尺巾四尺の溝を鑿ちありしが當時戦争中なるに拘らず砲側に義兵一人も在らず只山上に士官を見たるのみ村内には三百餘の砲兵ありて見たり是等は毎朝山に出でゝ監視し夜は箱屋に箱泊するといふ此地方にては牛豚驢馬其他の財産悉皆掠奪せられ村民皆他所へ避難し義兵乱暴を極む

十一日金家屯を過ぐ村民ハ日本人軍艦又ハ馳
逐艦ら既このこのこのこのこのこのこの近
きにちらと飲喜し居り
旅順に着し物價を聞きしに靴の如き品ハ却つ
て高かるし石油ハ一斤三十錢麥粉一俵四元半
長價ならば六七留パン一個五錢支那料理の値
段ハ平日の十倍以上にて而も原料少し豚一頭
一留半鶏一羽五錢乃至十錢牛一頭五留位にて
微發し驢馬ハ無賃にて借上げ持主同行せざれ
ハ行方不明となり同行すれハ食費を自辯する
を要せじヤンクの出入を禁ぜられ附近に農産
物なければ今後一ケ月日本軍来らざれハ旅順

金州一帶の支那人餓死を免れた
長兵ハ銃の扱方支那兵ら也拙なり大こ日軍
を恐怖し居れハ若し日軍上陸し支那人に銃を
與へんには長兵を破るべしといひ居り
亜總督を誡れる下級將校の言に二月九日の戰
に各砲台に彈丸の準備少なりしといふ
三月十日拂曉馳逐艦五隻港外に出でしが只二
隻帰り来りたり
軍艦の修繕ハ鉄を用れば手間取るを以て大抵
ハ木材を用ひ仮修繕をなし目下無理に運轉し
得べき軍艦七八隻馳逐艦十隻程ある由
特派員が実見せし處これハ船渠に船体の長

くして低き軍艦一隻あり東港の南側に大形の軍艦二隻あり修繕比較的容易なるものなり東港入口の前角にアスコリフト浮び居れり或る人八十二日軍艦駆逐艦十六七隻港外に出でし時アスコリフトは残り居りし故損傷せるならんといふも其錨地水深き場所なれば特派員は航海に堪ゆると断言せり

港の入口虎尾半島の岸に東清鉄道の大汽船沈没し甲板上には何物もなく海岸大岩の東に在る低き岩に乗り揚げ居り船体を見るのみ虎尾半島の港内に突出せる端の東に旗艦なりと称せる三本煙筒二本マストの大軍艦膠着し大損傷を蒙れりといか半島の先きの西側に四本煙筒の軍艦膠着す檣は砲弾に破壊されたるも一本も見にて其の南方即ち西港中半島の西岸に軍艦四隻及び三月十日に破壊せられし後深船一隻を見たり是等は皆修繕に時日を要すべきものなりといふ其の他の軍艦は港外に出でしと見に煙の港外に揚るを見たり軍艦は晝間十清里位迄進む事あるも夜間は常に港内に在り港口汽船の沈没せる東方に防材を設け入口の外に高艦二隻沈没し居りとの説あり

日本閉塞船の一隻は頗る艦船の出入を妨害すべき位置に沈没し居りといふ

陸兵ハ二十五聯隊二十八聯隊等の新兵其他騎兵砲兵を併せ二千人以下なる由民政廳ハ月給四十留こと四十餘人の支那人を探偵に雇使し怪しき人物などを捕へたる時ハ三四百留の賞金を與ふ

三月五日長團長廳の許可を得て牛莊に向ひ汽車に乗り支那人の数ハ平常の二倍なりしも總て金あこて強制的に下車せしめ小蘇家村築造中の砲台に使役せらる

糧食ハ紀鳳台の麥粉製造所前六個の石藏に充實せり其傍の匠鋸作りの小屋に米を備へ傍車場構内なる数棟の匠鋸等の倉に麥粉を

り時に満洲より麥粉を輸送し居れば食糧ハ十分なりとの説なり

旅順より小平頭に至る海岸大龍洞に百人小龍洞に四五十人鮑魚頭に二三十人駐屯せり小平頭の高家に二十五聯隊の兵三百人ありといふも実際見たる所百餘人なり小平頭の山上に大砲二門東海岸に一門を備へ沙嶺口にハ騎兵一支那馬なり)二百人なり沙嶺口より大ルニに至る途中に二千人の長兵なりて大ルニ市内にハ兵なし

大ルニの支那高人ハ九日頃皆開店せしに長團長廳より危険なれば營業せべしとの命令

り已むを得ず一人の通行し得る位の入口を開きて營業たる商店をも南関嶺にハ地雷火を敷設せりとゝふ

十五日再び旅順に入り聞く所に依れば十四日に老鉄山の近所より百餘人の支那人を集せ出發せんとしジヤンク三隻ハ老鉄山の砲台に發見せられ電話にて旅順に報せし結果駆逐艦数隻の追撃を受け一隻のジヤンクハ逃げ果せし二隻のジヤンクハ乗組員四名を殺され他の者ハ拘留せられジヤンクハ破壊せられたりと

十日の戦には本艦隊ハ攻撃後老鉄山の山陰に退き虎尾半島の砲台ハ老鉄山に遠ざかる日本艦隊を打つを得ざりしに懲りしためか十四日以来老鉄山燈台の東に一大砲台築造に着手し日々三百乃至五百人の農民を徴發し三百五十名の工兵を以て工事を急き居れり旅順各砲台の山にハ往来四合目に高さ五尺の木柵を廻らし鋼線の網を張りその後にハ八尺位隔てたる杭に二條の鋼線を通し居れり斯る工事ハ日本兵の突貫を防ぐにハ足らぬ何の目的にやと支那人さへ笑ひ居れり

停車場にハ線路を増し七百台の車を備へ退却の準備を為せるもの、如し

旅順より金州に至る迄大形のジヤンクハ海岸

旅順の三十一日

より二十五間小形のジヤンクハ数所陸地に引揚ぐべしとの規則を設け未だ所行せざるもジヤンクは大抵破壊せらるゝ完全のもの少なし

十八日北城隍内に於てシヤツ一枚の低端艇の中に絶命して漂着せし露国士官ら一名の死骸と海岸に漂着せし露兵ら二名の死骸とを見たり此特派員ハ本日午後二時芝罘に帰着せり

三月二十三日

第ヶ崖入れ乗船したるロロ丸ハ二十一日午後八時半廟島列島の西北三十哩の沖に無数の探海燈を認めり十一時半より午前三時迄ニハ只一個の探海燈を見たり又午前十一時ニハ廟島列島西北三十哩の沖に無数の煤烟を認めしが忽ち消滅せり同日午後九時にも大竹山島の正東十八哩に少数の探海燈を認めり十二時頃消滅したり

此航海中の丸の位地ハ常に旅順の砲聲を聞き得べき距離にありしに二十二日ハ天気晴朗にして終日老鉄山を認め居りしも砲声を聞ざりしといふ

浦潮砲撃と陸上損傷

西伯利亜鉄道輸送現状

三月二十四日

六日の浦汐攻撃に際しダヌ、イヌゲルに落ち
し彈丸は聯隊長の寢台を打貫き倉庫と聯隊旗
の側に落ち隊長の妻と信號兵の手にて僅に聯
隊旗を持出したり又東部西伯利亜海兵團に於
ては一彈丸は水兵五名を殺したり市内にて即死
せし婦人は水雷製造所職工の妻なり

西伯利亜鐵道の輸送力不十分にして一昼夜十
一回發車をる為め起點より二千數百哩里（イ
ルクツクなるべし）の間に長さ三百十五サーゼ

第四回旅順攻撃

ンに以上の行違ひ場二十ヶ所の築造に着手せり

本月九日夜日本艇隊が旅順外ニ一ヶ所上に
現はれたるを知り大佐マンテリウサツヶは四
隻の駆逐艇を率ひ復讐に出で明十日（十日）
優勢なる駆逐艇隊と勝算なき近距離の戦をな
しウラスワノイの艇長は水雷を以て敵の一隻
を撃沈し大佐と外二名の士官軽傷ス尉一名重
傷を負ひ兵卒二名戦死二名負傷せり七時半よ
り八時の間に軍艇十三隻駆逐艇十二隻より成
る日本艇隊旅順港外に現れたり露国駆逐艇
隊は帝に砲台援護の中に在るを勉めしがステ

レグレチー、レシタリヌイの二隻は敵對の虞
ち砲台と砲台との間を遮られ非常の激戰二時
間半に亘りたる結果ステレグレチーハ十二隻
に囲まれたるこゝろ〳〵マカロフ中將ハノーウヰ
クに坐乘しバアヤンを率ゐ救助に出でしがス
テレグレチー周囲に巡洋艦五隻居りしのみな
らず右二隻の出港を見て戰闘艦隊亦近き来り
警時にしてステレグレチーは沈没せり乘組員
中士官一名機関士一名兵四十餘名運命不明な
ほし多分捕虜となりしならんレシタリヌイの
兵二名負傷し辛うして逃げ込みたり日本艦隊
ハ朝八時より十二時まで八吋の砲を以て鳴海

及び老鉄山岬より砲台及び市街を砲撃したる
も敵艦に著しき損傷なし戰闘実見者の言
に日本駆逐艦一隻沈没し二隻ハ大損傷を受け
艦隊に戻られ行けりと又高砂も損害を受け
りと謂へるのみ始め虎尾半島と電気岬激し
く應戰せしが敵の近寄らざるを見て沈黙した
り敵ハ益〻盛に砲撃し其六隻ハ老鉄山の陰に
廻り全く見るを得ざる裏手より砲台全部を砲
撃せしが敵彈の尤も集中せしハ黄金山電気岬
西港湾内及新市街等なり敵彈の発射ハ十二吋
二百発なるべし新市街にてハ雜護士スヂロフ
スキー居宅の傍に爆裂せし彈片再び来り主人

と大佐フランクの為外一名即死し二名重傷を負ひ又傳車場にしハ客車に大損害を生ぜしめたり電気岬砲台の胸壁に爆裂せし彈片四散せしが参謀を率ゐて指揮し居たりし雲臺司令官代理スラッセル将軍等ハ幸ひに負傷せざりき此砲台より發射せし榴霰彈二十發中一發ハ戦闘一度に損害を與へしハ退却の途中盛に並列を弊けしにてし又速力の遅々しに依りても明なり砲台にハ戦死者なく黄金山にてハ大尉一名兵二名負傷し電気岬と十二頭砲台にてハ二十七聯隊の兵二名負傷せりとぞ

支那軍艦の投錨

浦汐情報

三月二十五日

支那軍艦一隻今朝来へ向け投錨せり

三月二十六日

浦汐より威海衛に引揚げし英国領事より談に曰く同地ハ糧食缺乏し英国領事館に一八箇月の糧食を貯蓄せし故英国臣民に必要の場合に之を徴発をべしと宣言せり引揚ハ露国の請求に因れり

英艦アイアレスは威海衛より韓国に向へ清国軍艦海環は答船出取締の為め威海衛廟島列島に向へ何れも投錨又ブリッヂ司令長官の坐乗せる英艦レピアサン神戸より威海衛に入港せり

夜艦の現状を視察せん為め旅順に赴けり某氏西三日前帰り報して曰く東清鉄道の桟橋より望見するに黄金山の鼻に當れる入口の辺り眞中に三本マスト一本煙筒の商船らしきもの船體を一尺程水上に現して沈没し居れり

尤も少し内部なる黄金山の側に竪に岸と併行して鉄鎖を以て連結せる防材なり而して入口の中央に達せんとする東港北東南の岸に二隻の軍艦なり一は煙筒二本、一は四本一は二本の三本の見定めざりき此三度は戦闘力を失はずといへ居るも尤も少し動きたる事なきらしき灰色の船甲板にマストル煙筒もなく僅に舳を現はして沈没し居るを見たり其向の側即ち虎尾平島の岸に船体の上部黒く下部赤くマスト煙筒共に無き商船らしき船舶を地上に乗せ艦の沈み居れるなり

船渠の内に障碍物を為し望見し得ざりき虎尾
半島の先の東岸に二本煙筒の軍艦あり西岸に
は五本煙筒のもの一隻太き低き煙筒三本にて
艦尾水上部の高きもの一隻　太く低き煙筒二
本のもの一隻　舳あり　艦尾　殆ど沈めるもの
一隻三本煙筒のもの一隻切り後の三隻は皆大
軍艦なり　五本煙筒にて後に起重機を備へたる
船何の仕事を為しつゝあるものゝ如し此等の右
方に二十隻程の駆逐艦あり駆逐艦の中に混じ
て黄色の煙筒三本なる仮装巡洋艦らしきもの
あり
尚南方に浚渫船あり是等半島沿岸に繋留せる

旅順附近敵の防備

船舶を隠し大損傷を受たる由西港中央に煙筒
なく三本の檣にて砲塔の上部なく兵舎居りし
ル砲なき一隻と二本煙筒の船一隻を見受けた
り
又右実見者の談に據れば全市北門内東の道側
に兵舎あり三百名の兵駐屯し其裏の空地に
馬糧山の如く又其周囲には石油を積みあり退
却の際火を放つ用意なりとゝふ南門外の南山
に五ヶ所の砲台あり野砲廿二門重砲六門を備
へ南門と南山の間に馬車を以て弾丸を運ぶべ
き車道あり海岸より西門に約一町の處より南

山近中三尺深さ三尺の壕を穿ち南山山脈に到る處同一の壕ハ綱の如く設けられ壕なき場所に人地雷火を埋ム南山の南方毛家營の東に亘る矣金に歩騎砲工兵三千五百以上ハ金州城壁の上に小速射砲台築造中にて北門外北山に九砲台を築き西門外ハ北山近壕を穿つ計畫ハ由而して十七日以来東西北の三門を閉ぢ支那人の出入を許さず城内住民食物の貯蓄ハ三箇月分迄なり其資産ハ多少避難されど馬賊の強奪に逢ふを以て止むを得ず城内に残り居る九三箇月後に小餓死を免れざらん却つて資産なきものハ僅少の旅費を以て避難しつゝある有様なり

金州ハ和尚山に至る約十清里の高地に砲台一ヶ所ハ大連灣に水雷を敷設せり金州澳ニハ水雷なし南三十里堡にも義兵駐在し旅人の旅順に至るを禁ぶ居り大道路の外側に地雷火を埋設し十六日に旅客三名之に觸れて即死ハ又南山にて十五日人夫四名即死

蓋平方面より金州旅順に向け日々汽車にて牛五十頭位義務送しつゝあり半拉山と三十里堡の間なる各停車場兵舎の周囲ハ壁を築き壁上に大斗入りの ブロクの袋に土を盛りたるも

の二つ先を重水馬賊の襲撃に備ふ

十一日四十里堡に於て我兵三名馬賊の為め打殺され銃を奪はれしが此事の我兵へ障害を与へ常に居らざりしめとゆふ兵舎には兵舎又八棟ありて歩兵二箇中隊工兵騎兵各一箇中隊駐屯し常に其近邊を往来し居り此地には鉄道の大工事場あり人気悪く怪しき支那人多くば直ち密告せり

二十一日営口に聞く所によれば二十日二十一日の両日八流車遼陽より大石橋へ来らんとゆふ馬賊の鉄道を破壊せしならんとの詳到なり馬賊は諸所に於て電線鉄道を切断破壊し居るとのゆふ

遼陽の東南に於て馬賊が我人二名を殺害したるのゆふは全村を焼棄せべしと告示せしを見て我兵は厳重なる取調べを為し隠蔽せば全村を焼棄せべしと威嚇せり

営口其他の地方に於ては日本探偵の捜索厳重にして軍籍に在る探偵に対しては二千弗其他に対しては千弗の懸賞逮捕を為せり営口より金州に至る一帯の地の支那人は皆我偵を厭ふ居り

三月二十七日

旅順へ糧食豪給

本月十日頃某外国汽船弩粉を搭載し旅順口に入港せるものあり其一袋を三弗乎づゝ二賣捌けりと云ふ

浦汐西南方の砲聲

十二日浦汐を發せし支那人の談に浦汐の西南の遠方に當り日々砲声聞ゆると

砲台築造と廣艇の大砲

二十一日旅順を發せし支那人の談に白玉山の標識の破壊せられし跡に砲台築造に着手せり又入口に坐礁せしめし汽船の甲板に大砲を据付たり起重機を備へたる船を以て敗殘軍艦より大砲を卸しつゝあり

旅順閉塞再計畫

牛莊より當地へ或外人方に達したる電報によれば今曉（二十七日）三時我馳逐隊八閉塞船四隻を率ゐて旅順港口に近寄り閉塞船を沈めたり而して我主戰艦隊八大砲聲を陸上に加へたり

牛莊の戒嚴令

三月二十八日

唯今接手したる電報によれば露国八牛莊に戒嚴令を布告し諸商人に對し更に通告の發せら

渤海方面の航運問題

支流船を同港に渡航せざると雲る旨通告せり

當地中立国の流船貨社ハ渡航中日本艦隊に検査せらるんを虞り禁制品を搭載し居らざるものにハ其証明を與へらるんことを水野領事に願ひたるも同領事ハ違何以来ハ中立地にあらずと称し之を拒絶せり

若し之を証明したるマニフェスト（積荷證書）に信を置く外一々積荷を検査するの権ハ之を有せざれば到底整理の道なかるへし

旅大支那人引揚計畫

旅順要塞開城

旅順ハ既ニ一に在る支那人逃船差向けの件に関し其後袁世凱氏より交渉を遂げたる結果露国当局者ハ旅大両港外に指定すべき沖合に於て六時間限り破泊し支那人を収容するを得るの條件を以て承諾せり

ニ達せり

奉天発にて当地に達せる電報によれハ二十大日夜日本艦隊ハ四隻の石船を以て港口を塞うんとし砲台ハ之を撃ち沈め其後露艦ハ港外に出ひしに日本艦隊ハ東に向て退却したりとい

一時出港の露艦

第二回旅順開港
別報

去二十五日當港沖に黒烟の黙々たるを認め
たるは是は露国艦隊なりしが如く其進
退域は旅順口沖六十浬を出で又廟嶋以西へし
来りたりと

當地外人記者に来りし電報に依れば昨朝我が
運送船四隻駆逐艦隊擁護の下に再び旅順口封
鎖の為め砲火を冒し港口に突進し四列を為し
て目的通り沈没し駆逐艦隊は二隊に分れて去
れり

彼我艦隊は暫時砲火を交へたり併し双方とも

清艦東航

露艦の暴虐

戰鬪力を減せず

三月二十九日

清国軍艦一隻今朝東に向へり

予は通信用に供せる目的を以て砲磯島に於て
ジヤンク一隻を買入れたるに依り去二十四日
傭通信汽船繁榮丸に使用の日本人一名支那
人二名を乗せ右買入の手續を終了せる為同
島に向はしめたり同船は砲磯島に到着し用
向を果たし帰航の途に二十六日午前七時過ぎ旅

日本流船の撃沈

順方面より来れる我国軍艦及び駆逐艦数隻に
出会したるに彼ハ理不盡にも洋上に於て撃突
丸を撃沈したり　船員及び便乗者邦人数名ハ我
艦に拉収せられ　船長ハ二名の邦人と共に幸に
難を逃れて附近の支那ジャンクに投じ漸くに
帰着をうを得たり　船長の處置にハ何等の欠点
なかりしものゝ如し　永敬の報告し置く

三月三十日

本邦流船繁栄丸ハ去る二十三日朝鳴列島の北
方旅順口を距る五十浬の大欽島にて我国軍艦

後艦の流船を撃沈

に砲撃せられ六十餘の砲撃を受けて沈没し乗
組日本人十三名支那人七名の内船長と水火夫
数名昨夕當地通台の許に着し昨夜我領事に引
渡され残り十七名ハ我艦に収容せられたり全
員死傷なし

日本流船繁栄丸去る二十六日我艦の砲撃する
所となりて沈没せり人命の損害なきものゝ如
く日清人十七名捕虜となり　船長初め三人の日
本人ハ昨夜當地に着せり日本領事之に論告な
る調査を遂げたる後登表して曰く繁栄丸ハ大
欽嶋沖二哩の處に於て砲撃されたり　即ち清国

旅順情報

領海の内なりとせば化どり其実際に沈没せ
ずは更に陸地を離れたる後なりと云々

去る二十六日レソオ島を発し本日當地に着
せるジャンクの齎せる所左の如し
十一日の攻撃にて露艦二隻沈没せり鳴湾旅順
に間諜村に於て露兵の凍死したるもの二十二
名なり其他の死傷者二百名に及ぶ
老鉄山の新砲台大破せり
露国人清人間に徴兵を行ひ之に露服を纏はし
め月三十留の給料を附與し居り
小銃の製造盛なり

繁栄丸撃沈詳報

レソオ嶋の附近村落にて塩を買ひ三里橋にて徴
発せる馬を用ひ盛に塩漬の製造を行ひ居り
又ジャンクの帆檣を切りこして黄金山鶏冠山
下に防材を布設せり

露国軍艦に裏沈されたる繁栄丸船長大山末吉
氏の談に據るに左の如し
繁栄丸は去る二十四日當地を発し二十六日蛇
磯嶋よりジャンクを曳き南陰城嶋に向ひたる
るのにして午前七時半老鉄山の方面に於て艦
隊の煤煙を認めなれば必ず我艦隊ならんと信
じ憶せることなく南北々東の針路を執り進

航せんとす一時間大欽鳴沖に至り四本煙突及び二本煙突の二大軍艦駆逐艦四隻を率ゐ列を離れて前進し来るに遇ひ同時に又一隻の駆逐艦遽に陸城嶋の蔭より出ひたり此艦直先と来りて彼我の距離七十間なるに至れるも繁家丸こなりてハ尚ほ其敵艦なるを覚らず然るに同艦ハ其時忽ち海軍旗を揚げて同時に三発の空砲を放ち端艇を卸しジャンクを臨検し又端艇を本船に横着けとし水兵士官乗込み来りて迅速に乗組員等を捕縛し収容せり然る船長大山末吉 油屋福江千太郎、高手清造の三名ハ漏らされて本船に残る斯くて二隻の駆逐艦

更らに三十間許の距離に来り本船を狙み速射砲を以て盛に其砲撃を始めたり

其弾丸一も命中せざるものなしと雖も尽く水線上なり又受けたる砲弾ハ其数六七十発に達せべし為めに艦室丸の汽罐破裂し甲板恰も蜂窩の如き状を呈せり其丸時事敵艦の引揚げたる比に及び稍〻大なる砲弾船中に命中し遂に三十分の後沈没せり斯くて右の三名ハ無事漢船に依りて蛇磯島に救ひ上げられ同嶋より釜山府に送られ昨夕陸路当地に帰着せりの当時の敵艦隊ハ軍艦八隻駆逐艦八隻成りたりと云々

支那の牛肉供給

鳳凰城附近敵情

營口の後方ゴダイシにハ新に二砲台築造され
たりと云ふ

本月平頃以来の鴨綠江岸に於ける敵情視察を
命ぜられ特派員の最近報に依れば鳳凰城にハ南
門外と東門外とに各第十四聯隊の歩兵五百
チチンスキー第一聯隊第三第四第六の三個中
隊の所謂克騎兵六七百餘騎
同地道台より告示を以て負糧十六の御村公廨に
對し各公廨より牛三頭若くハ四頭以上戸の大
貨物荷車二台花無償にて最人に給與せべし遵

帶せば道台より兵を發して督促せべしと命令
せり実際の徴發數ハ告示の規定を超過せるを
甚しく牛ハ屠殺して食糧とし馬車ハ盛に募集中
にて三頭以下戸の少なるものハ受取らず
黒パンの材料を袋に入れブックに蔽へる糧食
ハ南門外東門外の二個所に堆積し道台ハ最人
の依頼により部下の兵を以て之を監視し居れ
り支國士官ハ西門外角の文廟に宿泊せり昨年収
穫せし塩の鳳凰城安東縣附近に殘存せし四千
ブードは總て買収されたるなりと那人ハ死殺を協議
たるなりなりと噂せり
遼陽草河口ハ往来せる兵の時々宿泊せるのみ

外国艦船の牛莊

鳳凰城には多数軍隊の駐屯せるを聞の
む新暦正月以来道台以下清国官吏は此を得
を露国の虐政に苦しむ人民の苦情を採用せず鳳
凰城より牛河口に向ひ二十五里辺門には南側
山上一所以上の砲墨あり道の北側に四五十の
兵あり目下砲墨の築造中なり前面には石を詰
めたるブツクの袋を積み上げ濠頭砦の番兵は
特に厳重に旅客を検査しつゝあり

市俄古デイリイニユースの通信船外一隻の英
船は今朝牛莊に向ひ本年の初航海なり

鳳凰城附近激戦（つゞき）

沈河には第十第十二第十四第二十八第三十三
聯隊の歩兵三千餘市中の街々八軒に分屯せる東
部西伯利亜砲兵第一旅団第一大隊の五百名は
砲十六門を安東縣の西側の二軒の民家に据ゑ
矢張部も其近傍に在り新設騎兵独立旅団全部
二千餘騎九連城馬士台長甸一帯の地方に分屯
し次第の東北なる元宝山の前後鴨緑江岸一帯
には補充兵らしき四五千の歩兵あり十中の三
は武器を有せず二月二十日二十一日頃責将コ
ーロフの引率せる騎兵砲兵二千餘は鴨緑江を
渡り二百清里前進せしも未だ帰り来らずとい
ふ次第市街の北より対岸に舟橋を架設せる者

営口附近の敵情

の本月中旬既に民船を徴発し前後左右に一本宛鉄桿を建て板を打付け準備成れるもの六十餘隻あり尚無賃を以て盛に民船若干を徴発し工事中なり次家市街の米粟雷糸等を有する商店に対し露兵監視し之を動かすを許さず対岸の朝鮮人は大概上流に避難し其出発前露兵の荷物を防ぐ為め井中に石を沈め置けりと

最近の確報によれば営口市内西端に第十五聯隊の歩兵千餘名東端に第廿八聯隊の歩兵四五百あり東部西伯利亜砲兵第二旅団第三中隊の兵二百餘名砲八門を率ゐて二軒の支那商店を占領し停車場には砲兵二個中隊砲十六門と二百の騎兵あり

営口に於ける露国の軍需品

営口には南方十里の海岸白砂廠より営口の北四十五里立樹に至る沿道各村には二三十名以上の残兵を配置し總数六七百に達せ砲台には軍艦しウーチより卸したる大砲二門を据ゑ付け去る二十二日試験射撃をなし砲台の等備兵は二三百位に見受けらる該艦には尚大形の砲一門と小形大七門あり

露国は立高冊にて軍需品の輸送を上海なる米商茂盛公司に依頼せりとの説あり各商店の石

敵の逐河口自閉計畫

炭い徳し買上げられ停車場に運搬中なる汽車
こしハ石炭と木材と半分づゝ使用し居る二
箇月後に燃料欠乏の為め運轉し得ざるに至
るべし支那商人ハ銀兩絹布等の貴重品は山佐
関に送り店舗ハ僅に潜り戸を明け居る迄にし
殆ど閉店の姿なり

商人ハ自ら河口を防禦的に閉塞せん為め五六
十隻の端艇を買上げ既に汽車にて石材を海岸
まで運びたりたるも更に不同意を唱へたる為
め未だ石丈ハ沈めうずとゝふ

偶船去来

撃滅丸ハ魚形水雷

三月三十一日

樗逸軍艦ハンザ大沽より入港し午後五時西に
向け抜錨せり

撃滅丸ハ魚形水雷を積込み居たりとの事に関
し少しく前電を補ふべし同船ハ蛇磯島に着す
るや宮村田辺藤井沈泰祐桑豊盛の五
名上陸し只沒の頃帰りきりハ其時鳩湾の戦
戦後海上にて島民ハ拾ひ長さ三間の魚形水
雷を貰ひ受けしとて本船に積入れなり右五
名ハ其後再び上陸せしハ十二時帰船せり船長

敵の達東海岸圖

等も此の以外にハ詳細の事情を知らざる分紀
念の為め持帰る積りなりしものなり

決河の南和尚口より花園口と称する海岸一帯
に千百の騎兵を配置し大東溝にハ十人乃至二
十人宛にて毎日交代巡邏せしめ又ハ
兵站支部なりし此處に二三十騎駐屯し居
り

二月二十八九日頃ペーチンズーの北十五清里
ジンギヤトウズにて義團騎兵十六歳の少女を
強姦し二日後死亡に至らしめ
五道句にハ兵站支部なり大洋河の辺に三十騎

大孤山に三四百騎あり市内商店ハ殆ど閉店せ
り林子埡子にハ兵站支部なりし二三十騎駐屯
し青堆子に百騎莊河にハ六七十騎あり青堆子
より西南の海岸隆家屯 双家子 隆家站子 大
藍窩子 老頂山 大爺爐 花園口 狗兌河の各
村に八十騎乃至三十餘騎あり昼夜交代して商
地に上り海岸を看守し居れり
大孤山の西南六十清里の南咸子一山東有より
ジヤンクにて白菜を積み来り大孤山 青堆子
大東溝 沙河一運送し居れり貔子窩近傍にハ
六七百の馬賊ありとの確報に接せり

遼陽には東門外に第三聯隊城内に第二聯隊各
二千五百の歩兵あり近衛狙撃旅團なりと思はる
丶二三千城内と停車場とに分屯し三月六日以
前には露兵の異動甚しからざりしも其後著しき異
動なし
軍事探偵の嫌疑を受け砂河(昨電草河とせは
誤)に於て捕へられし年齢二十歳の日本人義
兵四名に押送せられ荷物馬車にて十二日遼陽
に着し同日哈爾賓に送られたる由
遼陽の北に連續せるコウリツ城には其附近よ
り買集めたる高粱の殻澤山あり又黒パンの材
料十七貫目入の袋を一列に四五百づゝ積み重
ね其五大十列にブツクの巖障をなして貯蓄せ
り
木植公司長なりしマタリロフの部下に属せ
る馬賊の統領田義年　李光臣の二人は支那人
七百を募集し露国の使役に供し田は遼河の西
に又李は城内にありて商盛に募集しつゝあり
此等の募兵には馬匹衣服食料の外一ヶ月八留
と支給し居れり
遼陽と鳳凰城との間リヤンヤーサン　甜水站
連山関　通遠堡　雪裡站の諸村には各〻兵站
支部ありて三十人内外の兵を置きパン製造所
もあり露兵は大なる赤銅の鍋を備へ自らパン

鴨緑江附近の敵情

を焼き居るものゝ如く箱舎ハ大抵二三百人を箱
泊せしむべし
遼陽より朝鮮境に至る道路ハ氷雪の融解せる
に隨ひ甚だ険悪なり
連山関に騎兵三百駐屯し居り該地にて一
頭戈小形の軍用馬車七八台に食料パン罐詰鍋
等を積み居るを見たり
沈河よりの最近報に拠れば龍巖浦にハ露兵な
く森林會社の露人ハ皆引上たり近頃露兵の川
を渡り朝鮮に進みしを見聞せず二十一二日頃
鴨緑江の開くるやいなや露人は沈河の上流二十

敵の砲位到着

二十一日旅順攻撃の話柔

里の馬子台より材木を流し来りしを沈河の沿
岸に積重ね川に面する側に泥を塗り居りと
云ふ
十九日発行の関東報に拠れば海軍少将モーラ
又は十七日太平洋艦隊参謀長に任ぜられ又要
塞司令長官スミルノフ中将ハ十七日旅順に着
せり
旅順より来りたる支那人の談に曰く二十二日
の砲撃により旅順鳩湾間の三ヶ村にて露兵支
那人の死傷二百餘人あり又老鉄山に築造中の

砲台大に破損せり露人ハ雙島附近にて塩を買
入れ徴発中の牛及び牛荷を輸送せる牛を三
里橋にて塩漬となし一つゝ旅順にしハ木を
以て盛んに銃を製造し居り又一ヶ月三十箇
にて支那人を雇ひ西正服を着せしめ輜重兵
となせり

明治三十七年四月分

芝罘電報集

旅順港口の閉塞

牛莊戒嚴令別報

四月一日

倫敦タイムス社屋船海門號の齎らしたる報に依れば旅順口港口は水雷艇の外出入出来ずと云へり

二十九日露國は戒嚴令を牛莊に布き外國人續々引揚げつゝあるロパトキンは同日奉天に着せし由

四月二日

タイムス通信員所見

通信船ハイムンに乗組ける倫敦タイムス海軍
擔當通信員コフーン少佐の談に依れば旅順と
距る十五浬まで進めるのみなれば閉塞の現情
を実見せるに由なきも新しく現に港内に浅船の
游弋せるを見たり現在の水路は約十三間なる
べく戦闘艦は漸く出入をなすを得べし青木氏は
或地点に於て我東郷司令長官に面会し我戦艦
六隻の現状を一見したるに士気旺盛にして諸
事整頓せるに驚きたりと頻に我海軍を賞
揚せり

繁栄丸乗組の支那人放還

四月三日

繁栄丸乗組の支那人十名は只今（三日午後三
時）じゃんくにて旅順より帰り来り其語る
所によれば二十六日二十名皆軍艦にて旅順に
連行され取調を受けたる末翌一日に至りじゃ
ンクに乗せ十里沖迄軍艦に送られて帰り来
たり日本人のみは別に留置せられしも無事な
り陸城島に義人一名通譯の支那人と共に探偵
の為め出張し居たるを見たり

四月四日

閉塞実見者談

旅順ゟ看せしジヤンクの船頭の談に拠れば
二月二十八日に沈めし我閉塞船の一隻はハル
ピン、ハイラルの二船より内部に入り東北に
向ひて西南に横たはり干潮の時には船体四五
尺を現せる報国丸なる可し
二月下旬入口の外部黄金山の外嶠より水路を
辿の間に露人八百二三十石積みのジヤンクを
集に石を積み東西に併べ沈めたり最初は干潮
のとき其橋を見しも今は見えず
二月二十八日第一回閉塞実行の後虎尾半島の
先きより東清鉄道の桟橋迄毎夜防材を並べ繋

ぎたる鉄鎖を引張りつゝ而して昼間は桟
橋の方の端を放ちて之を開き水路の出入を自
由とせる夜間に於ては我水雷艇の港内闖入を恐
るゝのみ
三月二十六日の第二回閉塞船三隻は黄金山の
嶠西南端に沈没し内一隻は岸より五間の處
を閉ぢ他の二隻は其南方にハルビン號より
外部に寄りて水路を塞ぎ南北に横たはり
て沈没し居るの如し閉塞船の最後の一隻は船
く其目的に到達し現在の水路は其東方に存し
て戦闘艦の通行は困難ならんと思はる他の事
艦ル出入に餘程の注意を要せ可し晴夜にて戦

鴨綠江岸情報

閉艦の往来絶對に不可能なるべく若し今一度
を此水路に沈めなば全く閉塞するべし
塔内の状況は前數回の報と異なる所なし陸上
の事を聞くに旅順の北は清軍水師營の北一里
の地に深さ一丈餘り巾二尺の壕を東西に掘り
つゝあり工事中なれば長さの及ぶ所詳かならず
ば堀上げたる土を以て南方二丈を距て壘を設
け北間及壕の北方に杭を建て鉄線を張り三
月二十六日以来一切支那人の流事に乗ることを禁
せり

二十八日大東溝を発せし支那人の話に同日大

敵艦出でたり

東溝より沖十八丁の間氷の流るゝを見なり大
東溝最も都岩浦へ各一ヶ所筏の橋を架けられ
り沈河附近に一島大東溝に五六千大孤山
に六七百の兵あり沈河より九連城近材木を
裏表に積み重ね其間に砂を盛れるものの袋
を入れ堡壘を作りあり九連城以北に尚築造
中なりといへり

四月五日

昨日牛莊より入港せる汽船四川號に義国艦隊
を見たりとの報に付取調べしに同船は廿八日

敵方よりの諸報

基隆より年庭に向ふ金中旅順を距る三十浬の沖にて大小二十七隻の露艦隊に遭ひ停船を命ぜらるゝ事となる

先に旅順に着せしキリールウラジミロヴチは太平洋艦隊司令長官海軍参謀長に任ぜらる

二十一日イルクツクに着したるクロパトキン将軍は三頭戍の馬車にて タンボウイノ停車場に向へり

莫斯科の市役所は黒龍江松花江の諸川に於ける病院船の為に附属品を準備せり

外国新聞記者等の釋放

パブロフ式

プラゴエシチエンスクの赤十字社は千五百の負傷者を収容せんとて準備に着手せり

ブルーグヤ將の公報は旅順港口に於けるスコールイ號沈没の報道を否認せり

四月六日

營にて抑留せられ居たる新聞記者二名及び其従者たる日本人は昨朝放免せらる

上海より膠州湾を経て入港せり 獨逸汽船二隻

旅順砲撃の電報

旅順沖の情報

れる前駐韓露公使パブロフ氏及び前露国代理領事に荷物を携へしめ上陸せしめ合同船に乗天津に赴くなり

昨朝我艦隊旅順を砲撃したりと聞く天津にて露国領事館に電報ありたり

芝罘発及び保定発の西洋船は今朝營口より入港したるが芝罘発は旅順沖にして四隻の汽船無燈にて通過せるを見又保定発は無数の探海燈を見たり

シウーチ旅の達換

營口の露艦は大砲其他の武器を陸揚し黒色に塗換へたりと云へり

營口情況続

四月六日

元清国陸軍々人にして先頃迄營口に居住し遼陽附近を常に往来し居たる商人の談に曰く遼陽と海城の間なる鞍山庄附近の村落にて民家を占領し駐屯せる露兵は一萬餘なりと称せるも実際は尚多数なるべし鞍山庄より奉天迄民家々々に付き兵の数量を調査せり

遼陽城には各一萬の兵あり營口の兵は出入

多く其兵数八新吉〻難〻

營にハ砲台に大砲二門と口徑四寸位の砲四十餘門を備へ修繕中と見に人夫を使役し居り砲架の前に材木を組み合せ之を高さ六七尺に積み上て其前に土を盛りたるスツクの袋を積重ね砲臺附近にハ一面に地雷を埋設し砲臺西側の下にジヤンクを使用し秘密に水雷を沈設し

つゝあり

停車場〻 砲臺の方面に五尺四方高さ三尺の砲架を運送たるを見たり停車場の四方三四清里を距て、地雷あり

去月廿一日に日本人一名韓人四名警察に拘留

せられ居るを見たり遠何ハ去月廿四日に開き

しが目下十餘隻の汽船碇泊し居り本月八日

以後に税関を開き積荷を許さゞ八日迄に入港

せる汽船の荷積を終り今後商船の出入を許さ

ざるとソは已に積出したる荷物ハ豆粕と油に

て日本と朝鮮に送らさる保證とし荷物と同

價の金を義情銀行に預け仕向港より着荷の電

報を得て保證金を還付する規定なり

廿二日哈爾賓を發せし者の談に曰く同地ハ兵

の往来頻繁なれども市街ハ平穏なり奉天にハ

一萬餘の兵あり

哈爾賓奉天巡

故の旅順攻撃

米國新聞通信船

夜商振順を去る

四月七日

アレキシーフ總督の陸軍參謀長ハ デリヒスキー中將とフールガ少將ニシテ海軍參謀長ハ ホワイトギフト少將なり 又マカロフ提督の參謀長ハ マラスヲ將なり

營口にて捕獲さるゝ米國通信船ハ既に釋放せらる 昨日大沽より白河を上航せり

目下旅順に在留せる露國商人ハ重なる店員を

通信員從者の押送

滿洲歸者談

送還せらるゝ市民の歸國に際しては軍隊より乘車券を給與せらるゝ

シカゴ、デーリーニユースの戰時通信員の從者日本人二名牛莊にて放免せられしと云ふは誤聞にして何れも奉天に押送せられ多分間諜として銃殺せらるべしと牛莊にて噂せり

今朝牛莊より入港せし汽船二隻より支那人三名滿洲方面より引揚げ来り其談話に依れば牛莊には四日二個の水雷を敷設して作業後場にハ土を盛りたる俵を澤山に積み

旅順沖の探照燈

上海盛に出を盛つゝあり
奉天の露兵中一萬は東門外に駐屯し奉天將軍
の交渉により露兵は皆城外に居る事となれり
露軍は荷馬車の徴發を交渉局（奉天衙門）に
依頼せしも交渉局は之に應ぜず仍りて勝手に
自ら村落より徴發せしもの既に三百臺に達せ
り
露軍は盲力を遼陽に集中せるものゝ如く遼陽
に於る糧食燃料等の準備並に兵員數最も多し
といふ

今朝牛莊より入港せし汽船セラシラ號は昨日

牛莊出入の商船警戒

午後八時過旅順沖にて探照燈を見たり

今朝牛莊より来りし同地稅関吏の談によれば
同地に入港せる船は砲臺の下流五哩半の所に
碇泊し戰時禁制品なきを示せる露國稅関吏
及び將軍士官の検査を受くるを要せ午前六時
以前又は午後六時以後に砲臺下を通過せる時
は砲撃さるゝの虞あり
露人は盛に牛莊の入口に水雷を敷設しつゝあ
れば現在既に入港せる數隻の船は一旦出港せ
は其後は水雷の危険を冒さに非ざれば入港せ
ざる能はず此後入港の船船なるべしと信ず

清国軍艦

キルコフと貝加爾鉄道

支那軍艦一隻来り芝罘へ入港せり

本日着せし三月十八日の関東報によれば露国大臣キルコフ公は軍隊軍用品の輸送を監視するため貝加爾湖の北方に駐在せしめ貝加爾迂回鉄道完成せる迄露都に帰らざるべしイルクツク新聞によれば同大臣は四月十四日貝加爾迂回鉄道の運輸を開始せん計画なりという又三月十六日露都発電に第一軍団長シタキルベルグ中将は満洲軍団指揮官の新下に属せり

豆粕輸出問題

四月九日

曩に當地の三井物産支店は豆粕を買入れ汽船を借入れて日本に積み出だせんとせしに當地の支那官憲は私に露国領事の意見を求め同領事は北京公使の指令を請い税関は其筋へ伺中なれば絶対に輸出を禁ぜざるも指令あるまで停止せと三井物産会社に言渡しなり税関は便税務司に通告なり外務部に問合中なり北京政府は未だ何等の指令を與へざるも露国領事は豆粕は馬糧なれば戦時禁制品なり

と主張し居る水野領事は支那の領外中立條規に反し豆粕の禁制品なりざるとと明白なりとの意見を固持し最初より抗議を提出し本国政府及び内田公使に電報し仕死に尽力せるも未だ其効を奏せず別に最後の策を講じつゝありとゆ上海より多少日本に輸出せし由なれども若し北清より豆粕の輸出を禁止せる の或は肥料に用ふる時機を過ぐるため停止せらるゝことは我農産物の收穫に對する大打撃なれば此際大に国民の輿論を喚起し清国の暁時なる態度を改むる方法を講ぜざれば独り本年の米作のみならず来年の收穫に迄大影響を及ぼすべし現に福島縣の如きは農民の代表者當地に来り直接入の運動をなし居れるも政府と国民が盛に後援を與ふることなれば其効なかるべし

四月十日

七日午後の特報に依れば遼陽には第一第三第十八第廿二第三十第三十一第四十一聯隊の歩兵約一萬餘砲兵三箇中隊總計七百五十人砲二十餘門なり

城門十清里以外に黄色青色紫色黒色の肩章あ

る歩兵駐屯隊にて陣き遼陽佟城大石橋鴨綠
江附近の兵八總計七八萬に近しとの説あり遼
陽鳳凰城の間を時々五百人位宛往来し居る八
支代の為なるべし
二十八日クロパトキンの遼陽に着せし頃近衛
狙擊歩兵旅團八本國より到着し此事八廿一日
前後にて一臺二廿餘人を搭載せる客車四十
台を以て一日に二回宛三日間引續き旅順へ輸
送せられたり停車場附近の宿舍にはリンセイ
ウサワテ以下の校將宿泊しクロパトキンは遼
陽城に近き宿舍に入りたり
哀人八最初雲殼高粱殼十萬フードの買入を城

内チーフンタイの支店に依せしが既に買集め
たる數量は未だ之に達せざる城の内外處々に秣
用雲殼堆積し居り又所々に居て地方に
積み上げたる堆秣あり其内に八高粱の殼過半
を占む又附近より麥を買入れ麥粉を製造し居
れり麥粉煙類八甚だ多し目下哀兵八高粱
を飯に炊き僧にテンペと稱する玉蜀黍の引
割を餅に製したる支那農民の食物を食し居れ
り
哀人八昨年中馬賊の領頭杜立山、李林を城内
に召煥せしが李林ハ支那官吏に殺されし居る
爾来杜立山八城内に入ることを好まず遼陽の西北

七十清里なる十北河に在り城内には李湖臣
田義率の二人代つて駐在せ杜立山の部下にて
二萬の馬賊は主として十北河附近に在り一千
人は遼陽城内に在り皆黒地に赤の飾りある二
重釦の長西亜服を着せ李湖臣は袖に二本の金
線ある支那服を着し短銃を帶び馬と
食糧とは自辯にして彈藥等は義人より給與し
一人の月給十五留なり
遼陽附近にて義兵の徴發せる人家は大小を論
せず一週間毎に三留の家賃を仕払ふ規定なる
ル義務に通せざる者の家主は請取らぬものあ
る由一日一名三留にて借上げた騾車五百

臺あり人民は驢馬の合捕を強ひ可成衰疲せる
ものの二三頭を選んで徴發に應じ他の驢馬は逃
し置くといふ
奉天より牛莊に至る鉄道の沿道三十清里毎に
鉄道等備兵を配置せる場所には電信柱あり少
し高き柱を立て下より上まで電線を張り其
内に油又は他の燃料を仕但めるが如し昨日
年哈爾賓に於て馬賊を捕へ人夫の工夫せしも
のにて火を附くれば二三清里四方を照す仕懸
なりしも成績良好ならざりしものなり柱毎に徴
夜交代せる番兵を附せ各停車場にも四五名あ
り奉天以北大石橋以南は未調査なり

有名なる義國仔用商紀風臺は昨四月中遼陽より
鳳凰城に至る鉄道を請負ひ之が工事に
着手して既に遼陽より世立清軍の地均しを了
り先に朝鮮地方に入りし義兵八百を一萬人
にして義國の勲章三個を有する朝鮮人其爲導
者たるより
鳳凰城より拉致されし
四十歳のもの一名三月十四日頃遼陽に着し三
人共少しく義語を解せ訊問係の諸に軍事探偵
なりといひ二十日頃洋服を着けたる日本男
子一名支那服を着けたる二十歳位の日本婦人
二名馬賊を傷ひ鉄道を破壊せんとせし嫌疑に

より遼陽にて捕縛され吟爾賓に押送せらる此
三人八七八百留を所持し居たるも又本月四日
横に文字の記入ありたる水夫用の帽子を被り
日本人二名遼陽に送られたり
遼陽附近の汽車に使用せる石炭八遼陽の東二
百三四十清里木牌山の産にして火力甚だ弱し
去る五日遼陽にて或る義國將軍は日本ビール
を飲み頭死せりとの説あり
牛莊に義兵八一萬餘なるべくアレキシーフは
六日奉天より牛莊に着し閲兵をなす
七日近營に破壊せる汽船三隻にして大概
積荷をなし此三度出港後稅関八出港事務を

取扱ひ物との説あり
牛莊にて一日本人を捕へたるものに八百留の
賞を與へと告示せり

清艦出港

四月十一日

清国軍艦一隻北方に向つて抜錨せり

試駆逐艦を水雷艦

四月十二日

本日午前八時八隻の駆逐艦水雷艦旅順よりが
ルニーに向へりとの報ありしといふ

英艦の賓客と情報

今朝未明牛莊より入港せり英船紹興號は昨日
午後老鉄山の砲臺を距る十哩の沖にて一隻の
露国巡洋艦に船内を捜索せられしが其際遠に
七隻の軍艦を見たりといふ

無義務中立と宣戦

近着の関東報に曰く三月二十六日未明巡洋艦
三隻より成れる我艦隊八(露)駆逐艦隊を率
及各方面偵察の為る近海に派遣せられたり十
時十五分駆逐艦ウニマーテリヌイは軍艦ノー
ビックの信號により前方に在るジヤンクを取
調ぶる命令を受けたり此時ノウビツクの砲塔

こちらー少尉マクリーモフはゴキガノ島（砲
磯島？）の先に碇泊してジャンクを引船せる一
隻の汽船を認めたるウニマーテリヌイは命を
受けて之を追うけ六十間の距離に到りて先ず
発砲したるに汽船ハ直に日章旗を卸したる定
めし敬礼せんとなるものなるべと思ひたに
更に其引揚を為さず（降参なる志なりしか）
南方全速力を以て陸岸に向おるの如し是に
於てウニマーテリヌイは急ぎ之に接近し第二
の発砲を為せしに汽船ハ進行を停止し其乗組
員の一部ハ引船せるジャンクに乗移りたる為
分綱を切りて逃出さんとす下心なるべし仍り

旅順沖の砲ち

て駆逐艦長は水雷用のボートを卸して少尉ピ
ーニーを乗せジャンクに向はせノーピック艦
長ハ自身乗組員を率ひて繁栄丸に寄せたり此
時ピーニー少尉の乗りたるボートは四名の日
本人及電信低数多を收容したり及び読船にハ
多くの兵と書類地図及び船長の日誌二條の雑
説ありしを報告せり

四月十三日

今朝九時半牛莊より帰港に入港せし汽船ラリ
ー號は（清語ローシン）今朝四時過老鉄山

日上海報

定州戦況の公報

マカロフの閉塞公報

支那の衛生列車

の方向に数個の探海燈を見且つ旅順方面に盛なる砲声を聞きたりとソ

旅順沖にて今朝五時より七時半まで盛なる砲撃を聞きたりその報あり尚ほ砲撃中なり

定州の戰（敵の公報）

マカロフの閉塞公報

十三豊の客車より成れるものにて技師二名助手一名看護婦十六名及び

衛生掛十六名の職員を搭載し一回百七十名を輸送し得る衛生列車は去る三十日午前七時死傷兵を載せて吉林に向け出発せり

艦長を乗せたるホートは流艇に近き轉覆し検査したる数名の日本人及び支那人三名現けんせり此等を近海艦に收容したる後取調べたに右三名の支那人は支那服を纏ひたる日本人なるを發見せり流艇には種々の書類地図信號表もれど式無線電信及び二個のカアイトハフド式水雷あり艦長は流艇を旅順に達れ行かんと欲し大尉スチールを乗せ

第一報

第二報

又に該船は老朽にして一時間五浬の速力なり。
さ為見て或は敵艦の襲撃を受け乗組大尉を失
はんを恐れ更に戎艦となりたるを繫ぎた
る繫索先の横折れなるを以て艦長は止むなく
撃沈せんに決し發砲を命令したり其沈没せる
と同時に艦艇はイオイル示ジャンクを撃沈
したりしゲサックの信號にて諸引上げ
こ着手し午後三時旅順に帰着せり信艦及び
ジャンクにて捕へられたる乗組の日本人十一
名の支那人及平服を着けたる三人(軍人
を意味せ)を尋問したる結果は未だ運搬せ
ざるジャンクを侵入し用務を帰ぶ

ル釜府の通達の交戦国の一方にジャンクを
貸與せべうと出ずと告示をなしたる日本
人は一ヶ月一艘に付三百円を支払ふと
いへども拘はらず支那人は此言を信ぜず
て通台の命に服したるを以て成効せざり
を是に於て日本人の勝力を以てジャンクを捕
へんと決心したり然れども我艦隊の為め其目的を
達せふこと能はざりしと利明し尚此の用
的以外に日本人は廟東利島の内に信號所を送
り軍用に供せんとせり而してカイトヘッド
式水雷は現に軍事上の目的に供せんとせも
のなりと明なり彼等日本人は死を決して沈

黙を守りし厳重なる而調の未だ威海衛より発したる数通の電報を見出したるが如き
も此電信を受而しかる此汽船と威海衛の間と如
何なる関係ありや注意すべきものなり

美国砲艦エスピエー外九隻其他の商船悉く
牛荘を出発せり目下同港に停泊せるは唯だ長
国砲艦ありのみ

第二回旅順攻撃

今十三日朝営口より着したるロクサン號船長
ジョンスボは自ら今朝未明旅順口附近に於て探
海燈の光煌々たるを認め又数回砲聲を聞き

達東沿岸敵情

たるハ確実なりと語り尚営口府よりも砲声
聞えたりとの報ありたり尚此地にてハ伝聞の
噂等はなし

貔子窩大孤山莊河附近にて馬賊蜂起し法
岸守備の義兵を悩し互に死傷あり旅順各砲台
の防禦力薄弱なる事確実となり
先頃貔子窩附近に我兵上陸せりとの説を傳へ
しものありしは本月初我駆逐艦金州湾の或る
地点にて飲料水と鶏卵を求めし事実を誤傳せ
しものなりん十日頃の夜営口の河口に来りて
水深を測量せる水先船が燈火を以て陸上に信

マカロフの戦死

號せるを砲台から露兵に日本艦隊の襲撃と誤認し四十四発発砲し其近邊のシヤンクー一度を打沈め又邦人四十四名の死傷を出したり

昔日に在る露軍の士官は逆臣に耽り居るも兵士は僅に高粱を以て餓を凌ぎつゝありしといふ又或将軍は遼陽の娼館にて死亡せりと傳へらるゝ以て露軍將校の如何に腐敗せるかを想ふべきなり

四月十四日

昨朝旅順口の海戰に於てマカロフ提督坐乘の戰闘艦は退却の際旅順港外の沈設水雷に掛りて沈没しマカロフ提督は溺死したりと某所に入電ありたり

ダルニーの雷の損失

ダルニー三山嶋に布設したる水雷大風の為め流れて其中三十餘箇連結したるもの十一日午後四時長山列嶋内の港サンカンピヨウに漂着したるを以て同地の漁夫之を拾ひ上げ其内一箇を四円にて土人に賣渡せり土人は其何物たるを知らで好奇心より鉄槌を以て之を打ちたるに忽ち大藥爆發し一家四人の男女即死せり

マカロフ提督戦死別報

旗艦ペトロパウロフスク水雷の為め破沒し
マカロフ提督溺死せりとの報あり

遼西孤順攻撃別報

昨日牛莊より威海衛に着せし英国軍艦エヲロ
トゲルの報告によれば昨朝ハーヤン號其他義
国の巡洋艦は旅順の港外に攻撃せられ砲火を
交りし港口にて難を認めたり

提督死を悼む

今回マカロフ提督の不幸に就ては當地内外人
一般に深く同情を表する所なり

安東縣巻頃

九日ジャンクにて安東縣を發し昨夕當地に着

大孤山方面情報

せし支那人の談に曰く安東縣には義兵凡二萬
あり河岸に材木を積み泥を塗り城壁の如くな
せり縣廳の後嬢々廟の或山と元宝山とには砲
を備ふ
大豆豆粕の輸出を許せし他の食料品は之を禁
ずれど頃は商人を丁重に取扱ひ相當の代價を支
拂ふ
鴨綠江の川幅約四五十度の樹を切り板を打つ
け何時にても船艙となし得る様準備し市街の
東端なる入江に繋留せり
六日大孤山を發し昨夜入港せり ジャンクの談

連日の砲撃

に四〇大孤山の西三清里リンヨーハンに兵營
つくりたるもの大孤山にていい商人等を鄭重に
取扱ひ物品の買上には最質を以て相當の代價
を仕拂ひ近頃一切船舶の積荷を禁ず露兵は唐
買黍の挽割をランペンに製して食料とす幽巖
より鳳凰城に牛五六十頭を送るを見し事より
云々

四月十五日

廟島列島附近より來りし清國軍艦の報に依れ
ば旅順口に於て昨日午前午後とも砲声聞えず探

埃國軍艦の西航

墺國軍艦

英艦の旅順出戰

海燈を見たりとゝふ砲撃を續け居たるか如
し

墺太利軍艦二隻西に向け出港せり

本日出港せし墺國軍艦二隻は港外にて演習を
為せり後歸港せり

英國軍艦エスピエールは牛莊より威海衛に
航行中十三日午後旅順沖にて我巡洋艦三隻パ
ーヤンを囲み盛んに砲撃し別に露艦一隻が救
助の為めに旅順より出ぜんとするを見たり

敵の廣瀬中佐
を中禁詳報

四月二日より五日まで又間諜報を聞きるに其
内に左の如き記事あり
三月二十七日日本人の沈没せしめたる福井丸
の舶に水兵長の死體浮み居るを発見し四月一
日午前八時海岸の拠軍病院より出棺し日章旗
を以て棺を覆ひ軍隊の先頭及士官之を引率せ
る海兵一小隊の儀仗兵を附し支那人の墓地に
埋葬せり途中にて支人脱帽し敬意を表し
たり悲愴なる死者の遺族尚故に心を表国人の敬
意に対して満足の意を表せりと水兵長の
今合錨を卸す時投げ込まんとするべく頭部に

陣地の彼方を見ゆる深さ約一インチの傷あり
冬の襯衣の上に数本の袖印ある紺色の短き水
兵服を着し頭巾付の外套を纏ひ面眼鏡を所持
し短剣を帯び衣嚢に二個の繃帯を附し居たり

皇族出陣

邦人捜索命厳

四月十六日

おりス太公は四月四日午前七時満州の戦地へ
出発せり

浦潮新聞極東報に曰く 廣岡者は沿海州及び
満州に入込める日本人捜査の為め非常に尽力

桂東海の特使隠出

せるが近頃日本人に同情を表せる朝鮮皇族朴
某（朴泳孝を指さるべし）が領袋の為々各地に
多数の韓人を派遣せるより韓人に対する警
戒も亦厳重となりぬ

同新聞のイルクツク通信に依れば近日来着せ
べき元里龍沼江隠督スポチチ中将は満洲の或
る要職に就くならんとつ

艦隊の午後出発

営口に冬籠りし居たる高国砲艦ピガイツチは
昨夕同港を出でたりとの噂あり

ピヤンヤンの艇告

十二日安東縣を発し昨夜入港せしピヤンク
の窟にとまる艇にはくれば十三日夕方該巖浦の沖合
に達せり頃上流に非常の砲声を聞きたり又十
五日午前二三時頃旅順ポルニーより来に当れ
る沖合に於て駆逐艇三度を先頭とし軍艦九度
の一隊之に次ぎ軍艦大度の一隊殿せる日本艦
隊の東南に進航せるを見たり又同時に西の方
面に砲聲を聞けり

鴨緑江船橋撤去

露兵い暴に鴨緑江に船橋を築設し居たるが近
頃に至り全く之を破壊したり之に因り朝鮮に
入込し露兵の既に悉く退却したることと確実な

業縣況情

り

安東縣の商人に徴発汽船一隻に対し七十留乃至百留の切付を交付せり河岸に沿へる材木の疊壁は三本宛積重ねて兵士を隠し得る高さとし其内側に八壕を掘り河岸より市街に通ずる細道に材木を以て閉塞せらる義兵三合の一位は銃を持たず将校は寡味に飽くに拘らず兵士は粗食飢を凌ぐに足らずと不平を訴へ居り大東溝より西北の山々及び山高き場所には窠殻を置附たる柱を建て巨大の準備を為せり（馬賊の夜間襲撃恐破のため）

十二日の旅順

日本艦隊に遇ふ

今朝八時頃より十時頃迄旅順方面に砲なる砲声を聞きたりとの確報なり

十一日安東縣を発し昨夕當地に着せし二隻のジャンクの商らも所に曰く十三日午前三時頃威海衛沖を過ぎ所に達せし時無燈にて西北に進行せる日本艦隊十隻に會せしが暗夜に乗じ雨激々たり軍艦と衝突し一隻のジャンクは艦の水上部を破壊せられ一隻は帆の一部を捲き取られたるが二隻とも死傷者なく無事入港せり

鴨綠江敵情雲報

四月十七日

十四日安東縣を發し昨日入港せし「ジヤンク」の報ずる所に據れば大東溝より安東縣に溯りし「ジヤンク」は十三日に龍巖浦附近にて武器を持たざる露兵五六騎深さ頸に達する鴨綠江を徒渉して北岸に歸るを見たり然るに安東縣より其次前二十騎程の斥候對岸に赴きしなれば其他のルカは戰死せしなんと噂せり

四月十八日

繁榮丸の魚形水雷

繁榮丸擊沈の際同艇に搭載し魚形水雷の搭載顛末に付先に水野領事は其取調方を通告に際会せしに昨夕通告は公文を領事に通牒して曰く其水雷は支那人佐上にして拾個形砲艦に持歸りしものにして繁榮丸が該島に到着せし時此事實を聞知し珍奇とし持歸る意なりしと見に四十番にて買取たる旨登和府知府より報告せり此に於て露國の切に捏造せる繁榮丸武裝せりとの口實は此確証に依り全く消滅せらるるなり

豆粕輸出解禁請報

四月十九日

去る九日の電報後に於ける豆粕輸出に関する交渉の經過を聞くに外務部は絶対に我要求を拒絶するの理由なきを以て露国領事と協商して輸出の要法を講究すべしと當地の適合に露国報せし法案適合は露国領事に交渡せしに露国領事は北清・日本・朝鮮に於ては豆粕が馬糧に使用せらるべきを主張して一歩も譲らざりき併し内田公使水野領事等の強硬なる談判の結果外務部は遂に従来我国に於て豆粕を使用せるは肥料に限るものと我主張の正当なるを確認し昨日輸出者に於て馬糧に使用せざる旨保証をなすときは輸出を許可せる旨露国公使に通知したるを以て更に當地適合に向つて保証の便法を定め輸出を許すべしと訓令せり

旅順の新水雷艇

風説最四訓の訓令

四月七日の関東報の記事に曰く先頃虎尾半島のメスチーエ場にて新造せる水雷艇の試運轉を行なしに其結果良好なりを用戦以来同工場にて製造したるものの之にて都合三隻なり

吉林省黒龍省及後貝加爾州陸軍管區臨時司令長官は北満及び後貝加爾に於ける軍人軍

飲酒兵逮捕の訓令

屬及び其家族に告示して曰く無根の風説を流布するものは千八百六十九年公布の軍律及び戒嚴令により厳刑に處すべしと

第三軍團長ステッセル將軍（在旅順）は耶穌復活祭の当日迄市中に於ける アルコール製飲料の發賣を禁し毎日午前九時より夜十二時に至る迄士官兵卒をして市街を巡回せしめ酒に醉へるものある時は直に逮捕すべしと令令し又當番の要塞兵に對しても祭日旦晴夜に入敵の襲撃あるを虞るを以て特に警戒を嚴にすべき旨令令せり

偽裝艇の出撃

鴨緑江対岸の敵兵

四月二十日

墺国軍艦エリサベットト及び偽裝駆逐艇一度就れも出港せり

本月十日頃鴨緑江附近を踏査せしものの報告に曰く安東縣に八四千餘の兵ありたり 時々増減の模様なり 元宝山の麓なる東南の小山に野砲五六門あり 此山下七道溝の東山にも四門あり 此地方の高地には到る處砲車を引揚げ

安東縣以北の川端には百八十清里の間一里毎に二三十名の哨兵を配置し九連城には步騎砲兵併せて三千内外あり安東縣より大東溝に至る九十清里の間五里毎に七八名位の哨兵を配置し大東溝には騎兵百四五十あり大東溝より大孤山に至る海岸百廿清里の間には百七八十の兵あるのみ大東溝より大孤山に至る東道は當れる大房身附近には步騎砲兵併せて三千内外あり騎兵かゝ多し大孤山には騎兵砲兵併せて四百あり彈藥車四十台を見たれど砲は見ざりき

大孤山より鳳凰城に至る途中には四百名の哨兵あるのみ鳳凰城と安東縣の間なる四門盤道嶺の二ヶ所及び鳳凰城の直兵は合計三千内外なりしが今回調査せし各地方直兵の食糧は缺乏の體にて農民の食物を強談して買ひ安東縣大東溝大孤山にては一俵五弗位の粉を二弗位にて微度し居るを兵士は慣れと甚しく日本軍の到来を待ち食糧缺乏の一原因にて騾子嶺小孤山等の海上を出没せる悪賊の强奪を防ぐ爲人夫に食糧を粉入せるに依るといふ稀には二ヶ月分の馬糧粟殼を有すと称する村落あるも概して缺乏せるが如し直兵駐北の條には火を放ちて引揚ぐる

清国軍艦

遼河の沈設水雷

満州敵兵の計数

なりんとす裝丈ハ恐怖し居り

四月二十一日

清国軍艦一隻西より入港す

露人ハ二三日前營口砲台の上流一哩ノ處ニ水雷の沈設を施りたり

或る信ずべき筋の調査によれハ現時チタ以南の満洲及び沿海州ニ在る露兵ハ合計約十萬に達し内遼陽以南遼河より鴨緑江ニ至る遼東全

旅順方面の近情

山東南沖の漂流水雷

部にちらばる合計約六萬なるべしと云ふ

七日に旅順を發足し十四日まで金州に在りたるものゝ曰く近来露國ハ旅順ガルニーにて汽車に乗ることを禁じ金州にて乗車を許し居り八日午後大雨の為め鉄道房屋の橋破壊し十二日迄で鉄道不通なりし昨今旅順の兵は大ニ增加せり又南関嶺の南の山ニも砲台あり

或る米国人ハ山東角を距る四十浬の沖ニ沈設水雷一個漂流せるを見たる旨米国領事ニ報告せり南方何處ニ漂流し居るやし知れざるハ

豆粕用途の落着

航海者ハ餘程注意を加へざるべからざるとなる

四月二十二日

當地より豆粕を日本に輸出するものハ馬糧に使用せざる保証をし其價格同一の現金を供託するか又ハ支那銀行の保証書若しくハ信用ある支那商人の保証書を提出するときは輸出を許し輸入地の支那領事にて馬糧に使用せざる通知を受たる時ハ保証金又ハ保証書を返戻する旨通台より水野領事に通知せり

獨艦出港

露艦の通信船拘留
英艦敵艦の行方不明

四月二十三日

本日獨逸軍艦出港せり

シカゴ デーリー ニュース汽船アドワン號昨日午後四時頃旅順黄金山沖約八海里の處にて四本煙突の水雷駆逐艦二隻に依りて嚴重なる取調を受け乗組員一同船底に押込られ二時間引行られたる後港に約三海里の處にて其船員に外出を許し海上水雷の沈設せる等種々の危険を冒し午後六時漸く出帆せるを得たり

右取調ハ特に無線電信ハ使用有無に付き行は

清艇西航

れたるものとして又書類の取調をも受けたり
該フアフン號の見たる所に據れば港内には黒
煙を吐けり幾艘の戰艦たりたる模様なりと
云へり
又フアフン號は鴨綠江より旅順を經て本日当
港に着せるものなり

四月二十五日

清国軍艦一隻西に向へ出港せり

四月二十六日

婦人会の義捐

通信船東征日本人の稽發

当地の日本婦人會員は開戰以来五百餘点の手
工品を製作し本日領事館内に於て開きたる
に非常の盛況を呈して更国領事通台其他外
国人競争して買取り五時頃には殆ど賣尽したり
賣上金千六百円の内純益八百円を赤十字社及
軍人救護会に寄附せる筈なり

四月二十八日

市俄古デーリー、ニユースの通信船フーアン
號に乘組み牛莊に拘留せられし日本人二名及

敵艦沈没の模様

今牛莊より帰り来る

関東報の記事に依れば青国戦闘艦ペトロパウロスク號の沈没したるは水雷一個艦首に爆発し續いて第二の水雷中央部に爆発し物凄き響きと共に艦尾高く上り推進器空中に空廻りとなり僅々二分間にして沈没したるなり

抑留邦人の釈放

營口に抑留せられたるしかご ヲーリー二人は日本人二名釈放せられ今朝當地に到着したり

清艦出港

敗残の旅順艦隊

清国軍艦一隻東に向け出港せり

二十三日旅順を發し牛莊を経て二十七日當地に到着せし旅順艦隊渠堀主工夫百人長の談に曰く十三日より十五日に至る戦争後港内に浮べる軍艦は三本煙筒一隻四本煙筒一隻三本煙筒四隻二本煙筒二隻二本煙筒の仮装巡洋艦らしきもの二隻にして詳細戦闘力を有するものは戦闘艦一隻巡洋艦三隻なり駆逐艦は開戦前約三十隻ありしが現今は十隻となり残は十五日の砲撃中修繕中の軍艦に居合はせしに間接射撃の砲弾艦部に命中し死傷をなすもの談艦

満洲沿岸の敵情

ハ到底最早用に堪へざる程の損傷を受けたり

最近敵情報告に曰く大連湾より大孤山に至る沿岸にハ凡二十清里毎に騎兵十人より成る監視隊を配置して日夜交代海面を監視し居り花園口にハ騎兵七八十と野砲二門ありのみ双頭湾より營口に至る沿岸の監視隊ハ一隊凡三十騎より成り各隊互に或方法を以て聯絡し居り其監視隊營所の数ハ双頭湾より普蘭店の間に十ヶ所普蘭店より蓋平湾の間十八ヶ所なり過日来頻りに糧食其他の軍需品を旅順より蓋平停車場に輸送し

牛莊在留の外国人

鴨緑江討岸敵情

順次大石橋附近へ轉送したるものの如し

四月二十九日

牛莊にては震動に電信を検閲し又同地居留の外国人ハ勢て夜国民と同一に待遇されん旨憲の命令に従はざるものハ軍法にて處分せらる

ジヤンクにて十二日安東縣を出で二十二日大東溝を発し昨日芝罘に着せし支那人の談に曰く虎山九連城にハ夜兵一千ありて安東縣にハ

鴨綠江對岸の情況

エシチエンこの引率せる兵二千より元宝山の
東山及び縣衙の後の山三ケ所に合計十五門の
砲より大東溝には五百の兵より大孤山には兵
千餘砲六門より龍巖浦の沿岸には水雷を沈設
せしが日本軍之を撤去せり安東縣には元来義
軍の小志気三隊より成りしが一隊は淺瀬に坐礁し
一隊は六七日頃大東溝に向へり行方不明
となり残り一隊は尚ほ安東縣に繫留せり

昨日義州より帰来せる人の談に曰く平壤より
義州に至る道路は泥濘既に乾き橋梁き部分は
一寸厚さの板にし敷詰りたれは坦々たる良道
となり北韓我軍士気大に振へり虎山には敵
の砲兵二大隊と野砲四十門より義軍は此程来
遽に攻撃を取りたる軍司令部は目下鳳凰
城にありものゝ如く續々兵を遼陽より增派し
つゝあり
クロパトキン将軍は指揮せん為め既に遼
陽より鳳凰城に進發したる各敵の兵数は鳳凰
城に一萬四千乃至二萬安東縣に一萬七千餘九
連城に九千餘大東溝附近には二中隊若くは三
中隊を北處從處に配備し居り大東溝より九
連城に至る鴨綠江沿岸には敵は馬賊を使役し
て諸所に地雷を敷設したり皆役(費)せり 昌城

旅順の砲声

對岸方面の敵の防備は薄弱なるもの、如し
鴨緑江の水量は目下普通にして河の中流洲の
柳其他の樹木は皆敵の焼拂ひ所となり安東
縣の支那人は少數を除くの外皆同地に在り

四月三十日

營口より只今到着したる二隻のジャンクは昨
日午前十時三十分友鉄山沖にて砲声の殷々た
るを聞き又廟嶋列嶋より只今入港したるジャ
ンクも同じく砲声を聞きたりと云ふ

敵艦逃げ去る
（敵方生存者の証言）

四月二十九日

四月十九日の関東報の記事に曰く十三日黎明
敵艦十七八隻は港外に進出せり我駆逐艦を艦
隊我に之に應戰したるも次第に敵の包囲する
所となり此時バーヤンは之を援けんとして港
内より出でゝ敵に突撃を試みし駆逐艦を救ひ得
たりしバーヤン自ら包囲攻撃せらるゝに至れ
り依て我艦隊は之を救はんとして一齊に出て激
烈なる砲火を交へたるに敵は漸次退却し遂
に南方水線下に影を失へり少時ありて旗艦ペ
トロパウロフスクは東北に當つて更に十三隻

の敵艦を認めしうるや直ちに引帰し黄金山燈台の下に陣列を敷き守勢を取らんと欲し真先に進航したるに敵の沈設したる水雷圏内に突入したるものゝ如く忽ち轟然たる爆声と共に船首右舷に大なる水柱を認め船尾の十二吋砲附近にて一物は遠く海中に跳ね飛ばされたり此瞬間第二の爆声と共に艦内に黄みたる灰色き煙充に満ち艦を水中に突入みて直立しスクリユーは空中高く回転し一分間の後艦は全く沈没したり其利那更に大なる響を聞きしが今分厚薬庫の爆発したるものなるべしマカロフ将軍は当時キリル太公と共に艦橋にありて

旅順敵艦損害録

旅順近情

揮指しつゝありしうち大なる負傷を受けし海中に投げ込まれたるものなるべし

露人側の報告に據れば去る十三日の戦争に駆逐艦六隻行方不明となり軍艦ペトロパウロウスク沈没ポピエダ損傷せり其他の三隻も破損せりとゝふ

旅順帰客の談に四月十日頃民政廳へ一梱に付四箇の孝松三千袋を二留平花にて人民に分與せり又同人の言に黄金山より東北白玉山の裏手に添ひ旅順市街背面全部に高サ四間位の壁

浦港の防材と石炭

通信船乗組日本人の捕縛

壁を築き諸所に門を設け番兵を附し厳守

浦汐の帰客曰く港の入口には防材を設け東南の山麓に石炭を貯蔵せり

デーリー、ニュース通信船ファン號に乗組み旅順に拘禁されし今朝帰り来りしは戸谷松太郎安田泰次郎の二名にして戸谷氏の談に曰くファン號は三月三十一日午後牛莊沖に碇泊せしが當日は露国の祭日なりしを以て税関官吏は未だ出勤せず一日午後清軍士官一名外四名の税関吏と露兵四名ランチにて検査に来り ロツシエボルとなびリツハンの二通信者が其従者なりと引渡を拒絶せるに依りて二名をランチに移し戸谷の手提鞄に時事新報附録の満韓地図なりと怪しみて鞄と共に押収し翌日は引潮の為め沖に一泊し二日西稜税関に着し三十分の後七人の露兵に伴われ英米領事館附近の兵營に連れ行かれしが引渡をべき官吏迄なら ず二時間の後別室に出で来り電話にて関合せ一先ず兵營内の獄屋に入れしが暫時にして領事場に近き清軍司令部に連れ行かれ一時間に渡されたり何故に牛莊に来りしかと石炭を積む為に門司に行くとの事なり

りーが突然牛莊に進航せゝ故自分等ハ兵船を
好まざりしに此船ハ英国船にして新聞記者の
注者なれバ上陸さへせざれバ差支なしといゝ
にゝ者ゝなゝと辯解し放免を請ゝし得
官ハ戦争中なれバ命の毒ながら直に放免せる
を得ず大石橋に押送せべきにゝ同地にて辯
解せべしと言へり又同将官ハ廣島に日本兵ち
ゆや否や旦つ仁川、鎮南浦にある兵数を訊問
せり同夜大石橋に着し日本語に通ずる露人ヤ
通譯を以て保護身分職業記者ヤ従者となし
契約の條件牛莊近航海の模様兵役に就きしやや
否賞て満洲に居りしやを形調べられ停車

場の料理店にて食物を喫へられ當夜ハ列車内
に一泊せり
三日四人の兵と共に発車し途中に一泊四日夕
刻遼陽に着し引渡すべき場所迄送らざる為
時間を費しせる後二名の士官ハ日本人ヤ通譯
にゝ二人の訊問せるとと前回の如く且朝鮮
に於ける兵数物何伏見宮野津馬木井上諸陸将
及び東郷提軍中将ハ何處に居ヤなど訊問さ
れたる後遼陽の司令部に送られ番兵室に留置
せらる
七日に至り新設の獄舎に入られ支那人一名朝
鮮人一名と同居せ十九日午前二時頃放免の通

知を受け七時頃三人の兵に護送され出発し遼陽城と遼陽停車場の中央になる停車場の始末
警舎にて切符を受取り休息中一兵卒の談話に
曰く遼陽停車場には十二名の日本捕虜なり一
名は將官九人は兵卒二名は女子なり將官にな
らば待遇なりと以ての如しなりと云へと
遼陽より一時間半位にして廣き野原に無數の
兵營と砲車を見たり太石橋に至る途中は橋毎
に番兵あり或橋にはズラクの米袋に土を盛り
塹壕を築き砲を備へたる所あり夜十時半頃大
石橋に着し停車場の料理店に一泊し廿日午前
十一時頃牛莊に向ふ太石橋停車場附近の山上
には砲塹あり砲兵騎兵の操練せるを見たり砲
車には露國の馬を用ひ騎兵は支那馬を用ひる
が如し赤十字の旗を掲げたる家三軒あり牛莊
に着せるや鉄道旅館の一室に拘禁せられ同夜
警察署に移され小食物等は從来より鄭重に待遇
を受く二十三日に至り便船次第牛莊に送還せ
べしとの通知を受け二十五日海軍大尉外八名
に護送せられ稍遅汽船ナンヤウ號に乗込み港
外に出でし時士官は露兵を撤去し放免を言い
渡し二十七日午前七時出帆二十八日午前
三時芝罘に着し
遼陽停車場附近は營舎パン製造所煉瓦製造所

キリル大公

等の築建地均道路修繕等の工事中なり牛莊遼陽に於て張力なる電気燈を點ず又牛莊港外の淺瀬に於て臺場を築造し居るが如し云々此二人の無事放免せらるし本在北京米国公使及び牛莊米国領事が熱心に露国に交渉せしに依る

四月三十日

三月十四日ポリス大公が遼陽より又アレキサンドロウヒツチ大公に発送したる電報に曰くペトロパウロスク沈没の当時キリル大公の艇榜の左方に投げられ次で甲板上に落墜し波と共に海中に捲き去られし本艇附屬の小蒸気の両数漂流来るを認めて之に移り付き十分間程待を支へ居りし後駆逐艇ベツシウムヲイに救はれたり

又ペトロパウロスク艇長ヤコレフ大佐は赤十字社病院にありて百方療養中なるも到底快復の見込なくキリル大公は非常に度悲しと知覺を失ひ居れり

三月十五日の砲撃に関しアレキシエフ總督の報告に曰く午前九時十五分十七度より成れる日本艦隊は二隊に分れ老鉄山方面より要

敵の野戦道路長官

りすウサツケ中将

達及び市街に向て射撃をなし百八十五度の砲
撃を放つに依て我艇隊も砲台と共に應戰したり敵艦は尤も多くペレビヨ山に碇泊し支那人七名と殺し砲兵五人と支那人三名を傷つけたり艇隊には毫も損害を蒙らむ

三月十四日長崎電報に曰く露西亞將ハ滿洲軍の野戰道路長官に任ぜられたり

唯今接手せる三月十五日より十五日に至る哈爾賓日誌に據れば日月五日滿洲軍臨時總指揮官りすウサツケ中將ハクロパトキン將軍到着

旅順入市制限令

哈爾賓に達せざる日本人

就任せるを以て現職を解かれ黑龍江省の陸軍管区指揮官同洲コサック兵頭領總督代理及び沿海洲防衛長官に任ぜられ直ちに出張せべき命を受け十四日奉天を發し赴任の途に就き既に哈爾賓を通過せりといふ

十七日旅順軍港司令長官は布告して曰く公務を有せざるものは旅順に入ることを嚴禁せ仕し軍港司令長官の特別許可狀を有するものは此限りに非ず

哈爾賓の西方鉄道線路にて捕へられ哈爾賓に

松花江の解氷

雪融後の航通修復

海洋島沖の日露軍艦

送てたる二名の日本人ハ蒙古服を着し且つ拳銃を所持せり其一名ハ支那語に精通し學識ありて如く他の一名ハ全く支那語を解せず二名とも蒙古語を解せず

松花江の氷解けたるを以て其航路ハ軍隊保護の下に例年の通り開通するべし

先般雪融の後多く哈爾賓南方及び其他各所の鉄道線路に大損害を生せしが今ハ全く成功

二十五日大孤山を發したるジャンクは二十六日の朝海洋島沖に於て日本軍艦を見たりといへり

滿州最近の情況

支那

市ふ滿州に特派せしめ哈爾賓を經て烏港まで視察する豫定を以て出發せしが軍隊輸送の為め通の汽車拔行ハ平素に比し三四倍の時間を要するにより驛員に賄賂を送りて貨車に便乘せし為め豫定の如く烏港に至る時日復命遅延して時機を失するの虞あるより哈爾賓の東約百三十清里阿什喀より引還したりとソふ其の報告概要左の如し

四月四日足罷を發し六日午前に着翌七日午前

廿八日遼陽着九日奉天着十日新臺子着十一日
寛城子着十二日岳門着十三日哈爾賓に到着し
其夜烏蘭浩線路に移り阿什喀に着す同地には騎
兵三百餘歩兵二百五十ありて停車場鉄道線路に
橋近くに小形の砲三門を据ゑ停車場内には新
に一分隊を設け客車十一台を置き鉄道官吏の
宿泊する所となる市街には露軍の買入れたる
粟、麥、粉、彩しく在るも支那官吏、人民の食
料及び馬を虜にし中吉林將軍の刈合なりと称
し之を他に積出すを許さず露軍と交渉中なり
といふ
阿什喀より哈爾賓に来る途中吾蒙嶺に騎兵百
二三十歩兵二百五十ありて停車場には汽車の燃
料に用ゐる薪三四十積みあるを見たり一積七
尺立方なり
十四日午後哈爾賓に着す哈爾賓の東南八里な
る廟房と哈爾賓の市街なる騎兵五百餘ありて市
街の東西両端及び廟房に歩兵八九百ありて松花
江の橋の南に歩兵三四百ありて河の北岸橋より
東に砲兵一中隊と長さ七尺の砲八門とありて橋
より西にブッタの東側に砂を盛り高さ六尺位
の砲台四ヶ所を築き一壘に西砲一門を据ゑ中橋の
西北嘶嗚台より砲台の西端河岸迄三四清里の
間四尺位の高さに丸太木を打込み塞となりち

り馬賊を防ぐため なんと唱せらる橋の近辺
に水雷を沈設し置き旗を以て區劃し其内に入
るものハ銃殺せ
哈爾賓機械廠にて ハ内部に材木を用ゐ外面に
鉄を鉄にて包める小舟六七十艘製造中なり其
多くハ長方形にして長ハ九尺巾五六尺なるも
中にハ舳の上りしものあり其長さ一丈二尺な
り既に出来上りし三四十艘を汽車に積み南に
送るを見たり
北京より到着せし義国兵ハ三十名十三日遼陽
に向へり
十四日佛国領事四名伊国領事四名北京より到

着せり
市街にハ驢馬と馬と買上ぐるより賃金ハ糧
豆に持来るべしと告示を市街に麥粉製造所七
ケ所ありしも三ケ所ハ現今休業中なり
山東省黄縣の人王範也なるもの過般アレキシ
ヽフ閣督の命を受け蒙古に至り馬一千頭餘を
買入れ帰途本月五六日頃齊々哈爾の北にて馬
賊の為ハ九百頭を掠奪されたるの報知あり
り義人ハ直に人を派し取調べしも残餘の馬
ハ勿論王範五の行方も不明なり哈爾賓の在
留領事ハ齊々哈爾の副頭領に向ひ馬を詮索せ
べし若し取戻せを得ざれバ損害を要求せと申

込みしに副頭流ハ自ら辯償をべーと回答し月
下交渉中なりとゝふ
哈爾賓の白頭山ゝ砲台を築く居る一日六十発
にて人夫を募集し居るも應ずるものなし
哈爾賓の西北数百清里なる蒙古の白都納にて
多量の大麥（一ヶ月八十五銭）を秣料に年
の食れる草（一ヶ月三銭）を買入れたる
ル現今雪融の為通路悪く車通せず夫故未だ哈
爾賓に着のびとゝ
十五日頃哈爾賓を發し三百清里を経て老燒溝
に着た同地ハ河岸にて緑色の肩章に数字なき
騎兵二百四五十、歩兵五六百と砲兵六百人餘

り橋の西南詰に駐屯を汽車用の薪ハ乾けるも
のと混りたるものと合せて百餘積を見受けた
り一積四尺四方高さ五尺にして乾きたる一積
ハ代價二十五留、混りたる一積ハ十八留なり
十六日寛城子に着た西門内の車箱四軒と西門
外支那人の大倉庫二棟とに歩兵五六百ありて寛
城子の北八清里なる二道溝にも騎兵二百三四
十と歩兵三百餘あり二道溝の山谷の南山上に
長さ三里巾五尺高さ三尺餘の塁壁あり二道溝
にて銃を刺ルなく帽子服靴共に破れ古ぶた
る歩兵の貨車四十三台にて行くを見たり寛城
子城内大道の穀物商清成號ゞ表人の傘を受け

買占に着手せし粟、米、麥粉の数量ハ非常に
夥しきものなり 王知府ハ之を禁止し交渉向ハ
長園の請求に応じ干渉せしも王知府ハ最に外
務部より命令を受け居ルハ其許可なき以上ハ
買占を許さじと清盛銃に言渡したりとなり
吉林と寛城子との間ハ長兵常に往来し吉林に
ハ兵最も多き時も歩騎兵五六百に過ぎず
十六日夜寛城子を發し十七日曉公都領に着セ
公都領にハ騎兵二百五六十歩兵二三百砲兵百
二三十とハ形の砲四門あり十三日將校二名阿
片の塊を呑みて自殺せりとなり
公都領の北三十清里黑林子の南に耶蘇教徒蘇

振山の長人の命を受けて近頃開きたる炭礦あ
り坑夫百人餘を雇ひ先頃より石炭採掘に着手
せり
十八日鉄山領に着セ北門外の車箱に騎兵三四百
あり歩兵五六百ハ西門外停車場附近に深く地
を堀り柔殻を根屋とし野営セ停車場の南一清
里半鉄道線路の南側にブロクの丈那袋を以て
各二ヶ所の砲台を築き四尺位の砲を据ヘ砲台
の南に東西一清里の間深さ三尺、底の巾一尺
地上の巾二尺の堀あり 停車場の西に一積二三
千束の秣を積み西門外長清銀行の西隣なる丈
那商人の倉庫に長人の北より送り来りし麥粉

百六七十斤入二三千袋を貯藏せ
新臺子ハ往返ハ晝間通過し歸途にハ晴夜通過
せしを以て步騎兵ちゝゝし其數を知るを得ざ
十九日奉天に着せ城内に砲兵四五百ちり外城
北門内東の欽差府に騎兵三百三十四、停車場
に步兵四五百、城外四方に步兵四五百ちり夜
間ハ城門を閉ち又城外の往來を嚴禁し交渉局
ハ最初露人の要求を拒絶せしも後に露國の
强請に餘儀なくせらゝれて支那兵を派して買集
めし二三千束の秣ハ停車場の西四ヶ所に集積
せらる露人ハ又交渉局に依賴し支那人の手を
經て毎日牛六十頭を買集め停車場の傍にて屠
殺し内類を送せる地方へ汽車にて分配を露國
ハ又支那式の鞍を八留にて買集めつゝちり

芝罘電報集

露国汽船の現況

露国ダルニーを奪ひたり

五月一日

ダルニーの巡査なりし印度人二人二日前同地を逃げ只今当地に来れり其語る所に依れば彼ルニー附近は悉し鉄道及源を破壊し鉄軌は殊ら陸ハルビン奉天に送れり必要書類貴重品派戦闘員八毎日之を送り去り市長警察署長及び数名の外諸官吏皆露京に去る可し露国はダルニーを捨てんとせるものゝ如し

東清鉄道汽船シルカ號ハダルニーより旅順口

大孤山方面、敵の根拠

〈石炭運搬の途中港外の水雷、悉く沈没せり

二十五日ジャンクにて大孤山を発せしもの
談に依れば二十二日午後我軍艦四隻、駆逐艦
十二隻（水雷艇も含む）大孤山沖に来り士
官兵士十七名ボートにて上陸し望遠鏡にて偵
察せる際敵の海岸監視兵之を発見して発砲し
たる為め士官等は軍艦に帰りたり敵は周章狼
狽殆間近四千餘の兵を大孤山に集め我兵の上
陸に備へ大騒動を演じたる由なりしと
とぞ

又ルプ旅順砲撃の説

老鉄山方面の砲声

ジャンクと沈設水雷

五月二日

本日我艦隊旅順を砲撃せりとの報あり

本日午後四時半頃より港せしジャンク集り
人曰く昨日西年老鉄山の西南十浬の沖に在り
し時一時間程砲声を聞たり夫れ軍艦は見当
らざりしと

二十七日の夜二隻のジャンク竊に外に二隻を
出発せしに八十人を搭載せる一隻に沈設水雷
の為め破壊したる由、六十人を集せ今朝未着

遼陽献情

せる他の一隻より聞知も

本日牛莊より入港せる同昇號は千名の支那人を搭載せり而して去る三十日に遼陽を発したるものゝ語に曰く北門外の東にジヤンクを以て一般橋を架設中なり北門の東と西に川と城との間に砲台を築造しつゝあり人夫の噂にて八順次城外四方に築造せる計畫なりといふ二十六日頃仮辮髪を付けたる日本人一名遼陽に捕へられ哈爾賓に送られたる由を聞けり云々

第三回旅順開塞

敵ロ前の大孤山方面

五月三日

在園側の電報に我艦隊昨夜より今朝に亦閉塞船九隻を旅順港に沈めたりと

二十五日大孤山を出し一日の朝より海洋島に風待ちして本日午後四時入港せり ジヤンクの報告に曰く出帆の当日陸上に露国の歩兵三千騎兵五百を見受けたり沖合には日本軍艦六又隻と汽船十隻ありしを見たり又同日大孤山の西南十里南山に支那人の服装を変せる日本兵の小船にて上陸せるを見たり蓋し三十日に日本

兵が使用せし支那人の帽子服靴等を海洋島に
持帰り返却せる事実にて上陸者の日本兵なる
ことを確めたり云々思ふに我海軍復讐隊が大孤
山沿岸に変装上陸せられ近来屢〻聞く所なり
尚此日本兵も亦復讐後艦隊に帰りしものなり
んるじやンクの乗組員は尚及海洋島に日本艦
隊七隻流船一隻碇泊し居りしと二十八日支
那軍艦海鷗沈日梅洋島に碇泊し夕方援軍せる
ことを目撃し一日午前七時海洋島出帆前より
一時間程北方に砲声を聞き駆逐艦七隻北方へ
向け航行せるを見たりといふ

旅順造船所と霍良順

霍良順は支那政府の時代より旅順造船所に
在職し義団起後引勤続せし三年前義団人
義人をして之に代らしめたるも何故にか再び
同人を雇入れ以て今日に至り同人は月俸五
百留の義団雇兵軍技師にして造船所内機器廠
掌理として事実上支那職工全体の進退を掌り
権力造船所長を凌ぎ旅順在留支那人の輿望を
擁し居たりき然るに今より一箇月以前義軍の
形勢日に非なるを見て汽車に乗じ立退らんと
せるを発見され無理に引戻されしがマカロフ
提督戦没後逃亡者を捜し二十五六日頃竊に天
津に立去りたりと蓋し造船所の工事上に

変装日本人銃殺
別報

第三次旅順口閉塞

非常の打撃なるべし

哈爾賓帰者談に曰く蒙古服を着けたる二名の日本人軍事探偵と認められ四月十六日哈爾賓より東北五十里の處にて銃殺せられたり内一名は高木某（神なるべん）なりといふ

五月四日

或る確つなる筋へ着電に依れば帝国艦隊は昨日午後濃霧を冒して九度の商船を旅順港口に進め敵の砲台の劇烈なる砲撃の下に爆沈せしめたり

日本写真師の銃殺

軍艦四隻西航

旅順港口の閉塞効を奏したるものの如し

四月二十四日の関東報に日本の写真師竹内某軍法会議に附せられ哈爾賓にて銃殺せられたりとの噂あり同人は露国軍人中に多くの得意を有せりとかふ

二十九日安東縣を発し今朝十時入港せしジャンク乗組員は曰く二日午後一、二時頃威海衛の西北二十哩の沖合にて某国の艦船約四十隻西に向け進航せるを見たり云々

満鉄調査

五月三日

廿一日遼陽に着き東門外烏房の敵の歩兵は以前より駐屯せる兵にして此日第二、三縣溝なる近傍安東縣より帰り来りしもの、由なり北門内四ケ所の大なる廟宇を病院に充て現今病者九百人を収容せり旅順にて負傷せし高橋の一将校此病院にて死亡せり城外西北隅の白塔寺に大砲八門砲兵二百五十あり城外鉄道の西側徐家往子に甚だ大なる亜鉛張りの兵舎二棟あり残兵五百餘を入る北門外北園の北辺に長さ二清里深五尺巾七八尺の壕あり城外西北隅にブツクの屋根を設けて百六七十人入五六千袋の麦粉を十箇所に集積せり停車場の鉄道東西両側にブツクの砂袋を高さ六尺程に積上げ其上に枕木を置き砲台となす其砲台八片側各二個所にして四五尺の砲一門宛を据ゑ砲兵百人餘駐屯せり

馬賊の頭領齋大振子八部下の田義年、李魁元李琉匪と共に責人より馬賊一万人募集の命を受け居るも既に募集せる馬賊八二千人外にして城内の車荷に駐屯せり

坎河橋の両側に二門宛合計四門の砲あり遼陽

より六十清里鞍山店に騎兵二百三四十砲兵
二百五十藍色の歩兵合せて五百内外駐屯し停
車場の南二里にして鉄道東側の小山と西側の
南山とに砲台築造中なり東の砲台は小山の上
に西の砲台は南山の半腹に在り
海城の城外西北に流る河の北岸に砲兵二百
五十歩兵四百餘地を掘りて野営す西門外停
車場の南水鴨舗岫巖より安東縣九連城に達す
る鉄道敷設に決し紀鳳台肩天成の二人を請
負ひ工夫募集の為め天津に赴きたり但し海城
附近にては彼等募集に出発せし後二十日餘
を経過するも工夫未だ来らざれば到底鉄道を敷設
せる事能はざるべしと噂せり
大石橋附近の山腹には天幕を張りて野営せる
騎兵四五百あり少数の歩兵は停車場の南に駐
屯せ一説に大石橋に多数の兵ありとゝふも停
車場附近には十二三軒の民家あるのみにして
兵舎なく牛莊附近全体にて露兵の全数四千餘
なりと派遣員の断言せり
旅順の負傷兵を乗せたる四十餘名の客車十三
日大石橋を通過して遼陽に向へり大石橋の
南一清里に牛を飼ひ置く地あり時々南方に移
送し現に二三百頭あり大石橋にては糧及び秣
を見ざりき

廿三日午前に着せる午家屯の停車場には黄色の騎兵二百餘名探海燈一基を備へ其東六七清里候家油房の北二清里大觀屯と停車場の三ケ所併せし歩兵二千五百名又午莊市街には歩兵分屯せる市街の西端朱慶將軍の糧台なり巨屋に砲兵五百砲十六門あり市街の西南元の支那兵營三ケ所中東の一棟は病院に充つ砲台には八大十の砲四十四門あり内六門は大口徑なり此巨砲は砲艦より卸したるものゝ由砲台には探海燈二基あり砲台の南十七清里半北三清里半の海中に水雷を沈設し十形のジヤンク十隻餘を置入れ昼夜水雷の設置を変更しつゝある

如し午後八時過ぎは市中點火を許さず又市街を往来せるものは銃殺せる二十一日の夜桃園に馬賊侵入し銃を放ちて掠奪せり夜兵は去月廿六日我艦隊の艦砲を聞くや直ちに支那の如く國章根祖松明を點じ大騒動を為せり河北の耶蘇教会堂は條約北京政府に照会し廿二十一、二十二、日の三日間三等汽車一台を借り切り毎日貧民百十名宛を輸送せしに廿三日に至り夜人之を禁止しいなし

今回通過せし各停車場構内には新に軌道を敷ケ一二等客車十餘台を置き鉄道官吏宿泊せり

車内にハ煙火を忌むもの多く各停車場にてハ汽車
若看の時の外點燈を禁ず牛莊と老焼溝の間に
ハ汽車にハ石炭を焚き老焼溝と哈爾賓の間ハ
石炭と薪とを混用し哈爾賓と浦汽間ハ薪を專
用せり牛莊より乗船せんとせしが船客の身体検
査嚴重なる為め二十四日山海関に出で太沽より
二十五日間に以上の視察を為し得たる特派
員が満洲の地理に通じ各地に知人も有之義誼
に通じ居るが為めなり鞍山店の砲台にハ自
ら人夫に変装して調査せるが如き機敏の復案
を設けたるものと称して確実の能通なりと

信ず
此特派員の談に依れハ哈爾賓以南の露兵ハ未
だ十萬に達せざるが如し
去三十日満洲特派員の敵情報告ハ確実を期せ
る為め直接に視察せる事実に止り露兵の数
の如きハ自ら踏査せし地方のみを掲げたり概
既報の外遼陽より哈爾賓の間煙臺、新臺子、開
原、昌圖府、双廟子、四平街、廟家屯、王家
屯、木又子、卜海、窯門、松林子、塔泥州、
石頭城子、蔡家、溝五家の各地にハ鉄道守備
兵の外多少の露兵を駐屯せるを得ざりき
其内開原と昌圖府とハ尤も多く窯門、石頭城子之

之に次ぐといふ

遼陽城外二十清里以内に数万の兵ありといふ
ものも多きも既報したる通り孫家子舟山堡沙
河の外近巷に散在する村落は二三十戸位の寒
村なれば多く見積るも現在遼陽の兵は一万を
出でざるべし現に日清戦役の際には遼陽の附
近十五清里の地支那兵を以て充満せしも尚二
万の兵を容る能はざりし実験によるも大概
推して知るべし

今日の旅行は烏庵迫急行する目的にして各停車
場共下車せざりしも又遼陽に着せしとき城外
西北隅に一積六百袋の麥粉四十積を車中より

数へしが帰路廿一日同地に着せしときは僅か
十積に減少し居りし又城外北辺及び鉄道の西
側に雲散の不規則に集積せるを見たり哈爾賓
より牛莊に至る迫撃兵の黒パンを食するもの
少く大概は其名を聞かざる粟飯を用ひ居る
も農民は粟を煮るを好まざる模様なり
義軍は一般に士気沮喪し支那人の侮蔑を招き
現に牛莊の支那人は敵を目本軍の力を仮
らば二百の馬賊を以て義軍を牛莊より撃退せ
んと放言し居る程なり沿道義兵の駐屯
せる所には粟殻を焼を付け油を注ぎたる狼火
柱を設け急に警報を為すの準備を為しあり

ダルニーの情報

五月五日

三日ダルニーの西石坎子を發し今朝入港せり
じヤンク曰く一日四年より九を一時間旅順方
面にて砲声を聞き又二日未明より明方まで同
方面に砲声を聞きたり　ダルニーにて鴨係
江の陸戰に露軍の死傷四千餘なりと噂せり四
月二十七八日頃ダルニー及び附近の露兵北方
に向ひたるもの多く現今殘り居るは七八百な
らん四月十八日一本煙筒二本マストの軍艦ダ
ルニーに沈設せる水雷の位置檢査中爆發沈

半島地頭の露兵數

ダルニー附近の情

没し下士以下五十名死亡せり
現在ダルニーにては大連灣通ひの汽船二隻あ
るのみなり云々

三日午後ダルニーの東南大詳島を發し五日午
後四時入港のじヤンク曰くダルニーより北に
全部南ハ長半島西は南関嶺に至る地方（全部
を含む）に在る露兵ハ三四千ならん

又右じヤンクの報に敵ハダルニー附近の鉄道
は一筋の外たべて取外し　ダルニー　器械廠の機
械と共に北へ送りたり

四月廿一二日頃露國商船一隻来り積み旅順に向け出港せしに三山島の西北にて水雷に当り沈没せり其後風の為め海岸に吹き流され岩にぶつかりて爆裂せし水雷ありと見たり

木製の剣と銃を持ち従軍なべき支那人の募集を徳代四人に命ぜしに應募者なき為め二十二三日頃右徳代四人は獄に投ぜられたり

二日ダルニー附近の農民に対し一毛に付粟殻五斤四毛に付高粱三升　粟二升其他有る限りの牛馬豚を徴発なべしと告示し無代價徴発を為せり

四日の旅順方面

旅順方面の砲声（別項）

三山島の東南にて昨日黎明より午後に至る迄旅順方面に砲声を聞きたりといふじヤンクちり

五月六日

ダルニーより只今当港に碇泊せる数度のじヤンクは何れも四日夜より五日夜に掛け旅順方面に盛なる砲声の起るを聞き又探海燈の光を認めたり数度の軍艦を見たりと云ふ我艦隊は某所への陸兵上陸掩護の為め運動を継続し居るものなりと察せらる

金家屯附近敵情

豆及び鶏冠菜禁

旅順の砲声

本月一日大連湾を發せし支那人より聞くに金家屯には歩兵一千二百餘騎兵四百と十二門の機関砲より来家屯に歩兵千餘騎兵千餘砲兵百二十と二十門餘の野砲ありとつふ

豆、豆粕、麩、胡麻粕、菜種粕、綿の実、鶏卵の八種は日本領事が交戰地に仕向ける事を證明する時は保証を要せず輸出し得るとなり

牛莊より今朝九時入港せしジャンクは五日午前一時頃老鉄山の西南十二三浬にて軍艦三隻を見午後十一時頃西南六十浬にて探海燈を見約一時間半老鉄山方面に砲声を聞きたりとい

ふ

五月五日

廣地の商人中安東縣に商店を有する者多く義兵が市街を焼掛けしを聞き大に激昂せり

又ダンニーにては住来義軍蜂行の邪語盛んに行はれ居りしが安東縣の焼掛の報ハ後

安東縣焼払と支那人

旅順降服せべし

日露兵の同地方を退却する際ブラゴエシチエンスク虐殺を再演するならんとの想像を起さしめ人心恟々たり兎に角安東縣の焼拂は露国に不利なる印象を支那人に与へたり

五月八日

旅順の事情に精通せる當地の支那人は我軍金州半島に上陸せるを聞き露軍は糧食尽くる迄旅順を固守すべきも遂に降を乞ひ明朝なれば之と隔絶せる多数兵を損ずるは無益なりと噂せり

露国の開戦に被害

ジャンク所見

清国軍艦

五月九日

山積を積み二日蓋河を發し八日午後七時入港せしジャンクの報告に曰く五日朝より午後四時頃近大連湾の方角に砲声を聞き西北に二十隻の船を見たり又海洋島にも五六隻を見たり

ギンスおんが旅順に於て露人のため殺害せられたりと云へり

清国軍艦一隻又西方より入港せり

旅行先ハ奉天府

牛莊撤退ヲ

旅順口の近状

アレキシーフとおりて太公奉天に着したる旨
昨夜露国領事館へ電報ありたりといふ

牛莊帰客の談に曰く去る七日同地の砲台より
大砲を卸し停車場に運搬するを見たり露人ハ
二三日内に牛莊より徹退すべしと信ぜらるる

五月十日

十日前に旅順口を去りしに今當地に着したる在
旅順口露国官辺より通譯なりし朝鮮人キンシン

セイの言に據ればマカロフ提督戦没以来各外
国人旅順口を退去し印度人、朝鮮人尽く放逐
せらる営業馬車の馬匹ハ何れも(馬軍)に徴発せ
られ営業者亦徴兵に編入せられたり野
戦病院、ホテル、オリエンタル、海軍倶楽部
等大破損を受け アレキシーフ徳督官舎五砲
弾を受けたり市街寂寞士気大に阻喪し居り
ハルビン、ハイラルの二汽船ハ病院船に代用
せられ西港内安全の地にありモンゴリア、カ
ザンの両汽船亦船体を白色に塗られ赤十字病
院船となりて旅順港内にありモンゴリア號ハ第
七回砲撃の際大損害を受けたりと

旅順艦隊の自滅（？）

牛莊の放棄

旅順口にある露艦七隻去る五月港内に於て自ら爆發破壞したり唯今旅順より来れる印度人之を目撃したりと云へり

五月九日

九日朝牛莊を發し今朝入港せる芝罘號の齎せる報に曰く牛莊の砲艦に黍殼を満載し何時にても焼捨つべき準備をなし市内には殆ど露兵を見ず砲台より大砲五門を卸し大石橋方面に輸送せり

満州各地の情況

本日午前一、二時頃老鉄山の北にて軍艦四五隻の探照灯を見たりと

満州各地より支那人五百人を搭載せる楊逸汽船八日午前九時牛莊を發し今朝入港せり大興安嶺隧道工事に通譯なりし支那人曰く近頃ハイラルに行きし時鐵道両側四十里位に多数の露兵の居るを見たり　三日午後三時齊々哈爾停車場にて日本人の捕虜北へ向け送らるるを見たり其内黒の帽子を被れる五名ハ上官にして黄色又ハ青色の帽子を被れる他の四十名ハ兵卒なる旨聞けり奉天にてハアレキセーフの

兼ゝ汽車を見たり遼陽にしハ多数の露兵の
南下せるを見たり云々
午後帰答読ニ六七日頃銃砲弾薬等を大石橋に
向け續々輸送し歩兵砲兵し汽車にし出発せり
砲艇の音尾に在りし大砲二門ハ甚後引却したり
ゝ砲台に上ぐる能はず甚低地上に放置せり
りと
蓋平帰答曰く露軍の徴発甚しきあり市中の商
民皆避難せんとす七日に彈丸の落りし列車四
台南より蓋平に着せりを見たり南方因船ハ本
日午前二三時頃迄鉄山の西北にし三四隻の軍
艇屯集せるを見たりとゝ

哈爾賓帰答陸

きりん太公と通相

哈爾賓よりの帰答読に二日海城の南十五清里
ニ在る鉄道橋何者ニ破壊せられ居り三日
西午汽車の開通せるに至る迄滞在せりと又大
石橋ニも多数の露兵南より来ると見たりと
本月一日の関東報にきりん太公ハ四月
廿七日南方より通信大臣ヒルコフ氏ハ北方よ
り各イルクーツクに着し直ちにバイカルに向け
同く出発せりと
五月十日

開墾実見談

旅順帰客談

開墾実見談（生死不明勇士の消息）

旅順より帰客曰く六日朝金州より汽車に乗りたる露兵ハ満載なりき（旅順行ト）九時過ぎには屯房站にて砲聲を聞けり七日大石橋に一泊せしに停車場外側には兵を見ず八日牛莊に着せしに市中ハ警官の巡邏せるのみにて軍隊を見ず砲二門を停車場に運送せるを見て市民に尋ねしに砲兵に据付けしの砲なりといへり

先月末日本の水兵二十名黄金山下の獄に投ぜらるゝを見たりと友人より聞けり

巴豆の寄談

寛城子帰客の談に六日牛莊に着せし時露兵に巴豆を賣るを禁ずと露国警察官より支那藥舗に命令せる告示を見たり蓋し露兵が戦争を怨れ遼陽又ハ奉天の病院に入院せるを望みて殊更に巴豆を用ひ腹痛を起さんとの支那人ハ洽笑し居れり

浦港の窮境

五月十一日

四月二十四日の極東報によれば烏港ハ戦争の

為幾人ど合圍の狀態にち且つ過日日本艦隊
の砲撃を受し以来各行政廳及び学校は尽く閉
鎖せられ住民の引上ぐるもの頻々として踵を
接し市民は既に過半数を減じ家屋は無代價に
て貸與せられ職業は皆無にして生活一般に困
難となり銀行は信用貸を停止し不渡手形甚だ
多し財産を賣却せんにも買手なくエラスラフ
ワコ、カストロムスキー及びミナグルトスカ
ン、サマルスキーの二農業銀行は貸金の回收
に力むるも應ぜるものなき為抵當物を競賣
に附せるため財界益不況に陥り無辜の人民は
一朝にして乞食となり山師は機に乘じて種々

なる奸策を廻らしつゝあり右の狀態なるにより廣廳は市会の決議に基き戰爭の終局まで前記農工銀行の貸金回收を延期して市民の困難を救はんことを大藏大臣に電稟し大藏大臣は右兩銀行に交渉中なりとす

義都より備地の外人に達せし電報によれば同地の大學生は義勇兵の極東に向け出發するを妨害せられキエフ、ハルコフ及びトムスクに於ても同一の狀態を呈し日本の日章旗を掲げたる獄に投せられしものとつゞ

ジャンク談

六日安東縣を發せしジャンク曰く風の為め廟島列島附近に吹き流されしに九日夜半過老鉄山方面に探海燈を認め同時に砲声四五發を聞けり

鉄道にて山艇を輸送す

五月十二日

大石橋より来る支那人等の談に依れば本月四日同地停車場に於て二隻の小艇を地方に輸送せるを見たり蓋し遼河航水雷艇を旅順より浦塩に送りたるにい非ざるべしと言へり

支那軍艦の西行

支那軍艦一隻西に向け出發せり

五月十一日

威海衛の英艦

英国一等巡洋艦アンドロニクス本日威海衛に入る

パブロフの銀行

五月十二日

元駐韓露国公使パブロフ氏来り

滿洲義軍の形態

遼陽大石橋に久しく滞在したるフィランド婦

人去る十日大石橋より營口に出で 云今當地に
来着したる義国士官の同婦人に語りたりと云
う所に依れば哈爾賓以南の鉄道は間断無く處
々を破壊せられ且つ汽車は緩慢なる運轉中に
屢々馬賊の射撃に遇い哈爾賓より大石橋へ三
日間汽車到着せざると又營口には兵千人に委せ大
砲を残して遼陽方面へ退却したりと云う

遼陽敵兵稍動く

九日遼陽を發せし者の話に曰く七日遼陽城東
門より来に向い歩兵騎兵合せて約八千進發し
たるを見たり城外東西北の三方に砲塁あり西
の砲台のみ大砲を据えたり

牛莊撤退狼籍

我破壊したる鉄道

如ニ敵兵現況

牛莊より の帰客曰く義人は豆粕製造者の馬を
徴發し砲一門に付二十頭の馬を以て四門を大
石橋に運送し十日 正午に又四百五十台の車を
以て彈薬糧食を大石橋に運送せり 云々

普蘭店にて我軍の破壊したる鉄路は延長五清
里なりとの報あり

五日朝ダルニーを發せし者の報に同地には歩
兵一千内外騎兵五十名十臺気球一隻ありヤンク七
八十隻ありと云々

奉天敵兵現報

四日奉天を發せし者曰く城内に一千、北門外に二百餘の歩兵ありしと云々

敵兵大孤山退却

五日大孤山を發し十日海洋島を經て今朝入港のジャンクの報に曰く大孤山附近の敵兵八三四の西日砲八門を率ゐ悉く退却せり依て豆を積み出港せしと

黄海に於ける軍艦

安東縣より来る支那船の報に曰く日本兵八五日に到来の由なりし出帆當日（即ち五日）さらに到着せむ六日午後大孤山より六十哩の沖にて一本煙突一本檣の小軍艦大速力にて西より来に行くを見たり九日海洋島に近づきし時円形の中軍艦一隻と二本煙突の大軍艦一隻が東より西に行くを見又十日海洋島の南方より軍艦三隻西北に行くを見十一日午後一時頃芝罘より東北方四哩にて軍艦五隻北に進むを見たり云々

我艦中の機関車

五月十三日

我軍八六日普蘭店にて機関車四台を分捕り六日以前に旅順に機関車五台ありしとぞ

ハルピン帰客談

遼陽病院大変

ハルピン帰客談に七日遼陽停車場にて澤丸の貨通せる客車三台と普蘭店より引上げし露国商人の一群を見たり牛莊より航海中丸房店にて或通辯者より聞く所にては六日日本軍ハ丸房店と普蘭店と二箇所の停車場を破壊し停車場に関係ある支那人ハ悉引揚げたり此二驛間の線路ハ全部破壊せられしものなりとの噂なり云々

遼陽帰客談に三四日頃負傷者二千餘遼陽に着し病院拡張を告ぐるに至り

遼陽動揺

旅順ガ心ニ情報

又帰客談に曰く七日歩兵一萬遼陽より南に向ひ進發せり遼陽周囲の砲臺ハすべて後功高さ約二丈ありて歩兵の大部分ハ三十里外の民舍にあり牛莊大石橋の武器糧食等ハ悉く遼陽に輸送しつつあり

去る八日旅順口を發し大連湾を経てゼヤンに依り今當地に未着せる清国人の談に據ハ大連湾にありし露兵ハ先て旅順口に去り同地の棧橋ハ破壊されたり尚ほ西口マカリ山上の新砲台にハ四門の砲あり水路の浮標ハ

第二軍上陸後

旅順の形勢

盡く之を撤去せり旅順口守護の為め残留し居たる僅の兵数のみ同港内に碇泊軍艦水雷艇等凡そ十五六艘なり港口は閉塞されたる儘にして依然たり浅瀬は旅順口全部ダルニー間に於て運轉を行ふ居ると云ふ

昨夜入港せしこカゴディリーニースの僧入船フーアン號の齎せる意見によれば第二軍は今日上陸を為り三四日後に旅順に進軍するならんと云ふ

旅順を發せし支那人曰く二日の閉塞は能く成功したり五六日頃露人は水上に現はれ居る閉塞船のマストに戈き綱を結ひ付け其位置を変更して終向きにしたり今後軍艦の出入に表文なりと露人は言へり居るも実際船の出入せしを見ざれば疑はしと

日兵黄金閣砲台占領

七日旅順を發し一八日金州に着し十一日じヤンリにて金州湾を發せしるのゝ言に日本軍の大部隊は金州の北五十清里なる五十里堡と普蘭店と瓦房店とに於て鉄道電線の破壊せられたる延長凡十清里なり云々

旅順爆発の声

芝罘にて旅順港内の露艦五日に自ら爆発沈没したりとの風説盛なるも余は之を信ぜざりしが前記旅順帰客に尋ねしに此の如き事実を知らぬといへり

五月十四日

旅順東方の砲声

七日午後を発せしじヤンクに曰く十一日夜金州沖航行中金州湾に探海燈一基を認め十二日午前一時頃旅順沖航行中旅順の東に當り遠方に七八発の砲声を聞きたりとぞ

白旗掲揚の職務

十一日夜遼にダルニーを発せしじヤンクに曰く大連湾ダルニーの兵は八日以来保々旅順に引揚げ両地各三四十名の露兵あるのみダルニーより引揚げ露兵は旅順に行けり日本兵攻め来らば白旗を掲ぐべし職務既に終り戦死せる必要なしと談り合せり三日後諜船三隻港内にて沈没せり港内には多数のジヤンクありて諸槽船帆を取り上げ出港せんと欲すれども鉄丘に用難き者多しとぞ

金州方面の砲声

一昨夜復州湾長興島を発せしジヤンクに曰く十三日暁方より夕刻迄終日時々金州方面に砲声

薩哈嗹の新守備兵（第四）

敵の新師団組成

敵の参謀長更迭

と聞きたり

四月十三日アレキシーフハ在サガレン島流罪者（約二萬人）を以て義勇守備兵を編成し應募者に對しては刑期短縮又ハ自由住居の特権を與へべしと布告せり

四月二十一日西伯利亜哥薩克屯田兵第四、第五、第七、第八の四旅隊を以て一個師団を編成したり

野戦参謀長代理おんしチエフエフエフ少將はサハロフ参謀長来任したるを以て現称を解任し沿海州派軍参謀長に任ぜられたり

吉林、奉天の西將軍は其管下人民に布告して曰く鉄路線路附近に百サーゼン（我三四百尺）内には高粱、蜀黍、麻、煙草等の丈高き植物を栽培せざる事、蔬菜、菜、麥等の穀類野菜を栽培すべし若し此命令に反し馬賊の身を匿もたる便ならしむる鉄道破壊等の損害を生ぜしむるに至りて知るべうらば

吉、奉両将軍の布告（敵の布告）

陣中の日本語研究

極東に於ける日本負傷者に便ならしむる為
夜間醫科大学に日語会話科を設けたり又日本
語の用会話の冊子を作りて各衛生隊病院に
配付せり

浦塩の食品欠乏

浦塩に於ては奢侈の欠乏甚しきため目下哈爾
賓より鉄道にて輸送せんことを其筋に請願し
此外石油、牛肉、等も欠乏し居れり

鴨緑江敗兵の利用

最近に達東より帰りしものの曰く貴大総に約一
萬と連山関に約一萬二千の露兵あり其大部分
鳳凰城より退却の敗兵なり云々

勿論なる可し

達陽海城間防禦工事

種々の風説ありも金州以南の丸鉄道開通し其
以北の不通なりしは確実なり

去る九日達陽を發せしものの曰く達陽より海城
に至る迄の街道(鉄道線路にならび)を中心
とし左右に畧して螺旋状を為せる三筋に警列
して昼夜兼行にて穴を掘りつゝあり深さ七尺
地上の直径三尺底の直径一尺五寸穴と穴との
距離二尺なりと云

金州の新消息

十一日金州を發せしものの曰く金州の北三十清

第三四閉塞船の情報

里なる藤家屯に少数の日本兵来り
又露人は大連湾の各鉄橋を破砕せり云々

五月十五日

本日四日の関東報に二日夜一時頃我哨艇ギリヤーク、オトワジヌイ、グリミヤスチーの三隻は敵の水雷艇の五隻の港口に近づくを認め直に砲撃して之を撃退し同時に閉塞隊を先頭とし敵の艦隊南方に現はれ漸次近距離に迫りたるを以て閉塞船の内一隻を撃沈し一時十五分更に二隻の閉塞船を認め是亦同

ルなく撃沈し引続き我閉塞船は敵艦に向て間断なく射撃を継続せり二時十五分同方面に四隻の閉塞船突進し来り内二隻は港口の防材に衝突して沈没し他の二隻は沿岸と哨艇の砲を受けて沈没せり二時四十分又三隻の閉塞船は急進して内一隻は横向きに陸岸に乗り上げ他一隻は砲撃を中止して沈没せり此間彼我の砲声殷々轟々光景凄愴を極む斯の如き有様なるを以て敵の閉塞船は端艇に乗り移りたるものし大概撃ち沈められ生還したるものは無なるべし此戰の開始せらるるアレキシーフ大将自ら参謀長ギリンスキー中将アベルバルト大佐等を

英軍の軍艦出入

関東艇の閉塞話

幸みしオドワジヌイに座乗しロスチンスキー少将亦太守の命こゝりギリヤークに乗りて指揮せり

支那軍艦一隻西に向け出港せ又未国軍艦一隻来りて入港せ

四時頃アレキシーフ大尉ハギリヤーグに乗り移り戦に参加したる各艦艇の殊勲者に勲章を無へ盛に其勇敢なるを賞賛せり

四時十五分敵の水雷艇突如として港口に現れ次で四隻の水雷艇もし詔ひ来り共に閉塞船乗組員救助の目的を有して来りしものならんも内一隻を撃沈せりとして他ハ退却せり敵ハ連射砲を連発せしも我要塞及び艦艇市街も一の損害なく市民ハ毫し驚愕することなく皆波止場に集りて観望せり

此次敵の艦隊ハ遠距離にて我探照燈を照射し遠に何等の行動に出でず八時半に至り稍〻港口に接近し閉塞船乗組員の帰り来るを待つ如くなりしが生還せるものなきを見て四年に至り皆引揚げたり

之れ先閉塞船を発したる二度の砲撃オトワジヌイに坐乗せる太守の傍に破裂せし模

敵の鉄道部長野営部長

傷なし敵の損害詳らかならざれ捕虜十九内士官二名共に重傷、水兵十七名内八名軽傷なり、外に重傷水兵十二名を収容せし悉く死亡せり敵の負傷者ハ病院船モンゴリアと海軍病院に収容し我水兵ハ敵の為めに其身体を温め衣服を加へ食物を給し懇切に待遇せり捕虜の言に依ればバ閉塞船ハ朝鮮の某港より出港せしものなりとゝ

陸軍中将ニヲルシルハ太守参謀附鉄道部長に任ぜらるるなり

バイカル航行開始

バイカル湖上の航路ハ本月五日より開始さるべしと

旅順港外の敵駆逐艦

近頃我駆逐艦旅順港外を往来せしに敵の駆逐艦港外に進み来るを見たるが敵ハ我艦隊の接近を来るを見て退却せりとの説尚地に傳はる稍信ずべきものなり

敵艦隊未自爆

下に在りしルのハ右ハ閉塞前より港外砲臺の或ハ駆逐艦に対して閉塞の効なきものハ不明なり

十一日夜到着せし義軍側の報によれば自ら艦

閉塞船の構

支那人の策略

陽を爆沈したるとの報道は閉塞せる日本船二隻を棹大藁にて爆破せんとしたるを誤認せしものならんといふ

九日旅順を發せし船渠豫工たりし支那人曰く露人は戎船を以て大いに閉塞船の位置を変せし(二四のうち三四のうち不明)後水上に突出せる閉塞船のマストを悉く切り取りたり又旅順に於ける船渠其他の諸工事は平常と異る事なく進捗しつゝあるうと

十日金州を發せし支那人曰く六日支那服を着たる日本人七名金州城に忍び入らんとして逆視兵の為に捕へられ銃殺されたり其後日本人の捜索一層嚴重にして二留を以て支那人を雇ひ附近の民家を戶毎に捜索せしめつゝありと又同人の言に依れば五日金州の東五十里に在る顧家嶺に日本兵来着せしとの事なり